べて暗黒褐色土中に含まれている。土壙などはなし。

8月10日（火）　台風7号のため、風強く終日作業中止。

8月11日（水）　晴。1号墳は、北トレンチの掘り下げを継続する。その結果、地山面での写真撮影の準備の精査中に、墳頂から約2ｍ下ったあたりで、わずかな傾斜の変換が認められた。

また、南トレンチでも、断ち割り断面を精査中に、墳頂から約2ｍ下ったあたりで傾斜変換を確認した。両トレンチで面的にも確認した。これは従来見落としていたものであった。両トレンチの傾斜変換点は、地山を強くカットしたもので、共通の状況を呈している。これを墳端としてよいと判断する。A区は何もしない。B区は、T8-1から平板測量を実施。発掘区では南北セクションを分層し、写真撮影の後、昼から実測を行う。その後、ベルトを除去し、角礫を検出する。南北セクションの実測の結果、調査区北部（2区）が下がっていることを確認する。が、これは深さ20㎝程度のもので明確なものではない。明確な溝とは呼べない。さらに、この調査区から北へ4ｍのトレンチ（3区）を新しく設定し発掘する。

8月12日（木）　晴のち曇。1号墳では、北トレンチを清掃後、全景写真の撮影を行う。その後、断ち割りを行い、さらに断面を精査し、昨日確認した墳端を追認する。最後に、断面写真を撮影する。南トレンチは、断ち割り断面の写真撮影を行う。1号墳の調査は、あと実測のみとなる。A区は、断ち割り断面の土層の分層を半分まで行う。B区は、角礫の検出状況の写真撮影の後、実測図を作成する。角礫は中央部に特に集中するが、組んだり敷いたりした状況には見えない。実測後、角礫を除去する。角礫のすぐ下には地山が見えるが、地山に直にのるものは少ない。角礫中心部の下から炭と鉄器(釘状鉄器)が若干出土し、焼土らしきものもある。明日の精査へまわす。また、B区の平板測量をT9に立て継続実施する。

8月13日（金）　曇のち雨。1号墳の調査区の実測を行う。北トレンチは、断面図と平面図(S=1/20、25㎝コンター）を実測完了。南トレンチは断面図を完了するが、平面図は昼前から強くなった雨のため断念する。

8月16日（月）　晴のち曇。1号墳は朝一番に北トレンチの埋め戻しを行う。平行して南トレンチの平面図を作成する。実測完了次第、埋め戻す。さらに、埋め戻しの不十分であった墳頂部に土を追加する。午前中で作業完了。A区は、断面図・平面図を1号墳と同じ要領で実施する。昼過ぎに完了する。B区は、3区の精査を実施したところ、南側と北側に落ち込みを検出する。南側の落ち込みはプラン・断面が不整形であることから、根などの撹乱と判断される。北側の落ち込みは、長方形であり、底もほぼ平である。内部の土は南側同様の地山が風化したような黄褐色砂質土である。これは人工的な遺構としてよいか判断に苦しむ。この横に、細長い溝状の遺構があり、これも木の根であるのか、否か不明である。両方とも検出プランを確認せず、セクションものこさず軟質の部分を掘ったため、疑問をのこしてしまった。また、午後から平板測量を実施する。1区は東西・南北セクションを実測し、除去する。地山上から鉄器片と炭が続いて出土する。検出途中で、3時ごろから雨が強くなり、中断する。

8月17日（火）　昨日検出した炭と鉄器の検出を続ける。

8月18日（水）　3区東壁の実測を行う。

8月23日（月）　2区西壁の実測を行う。

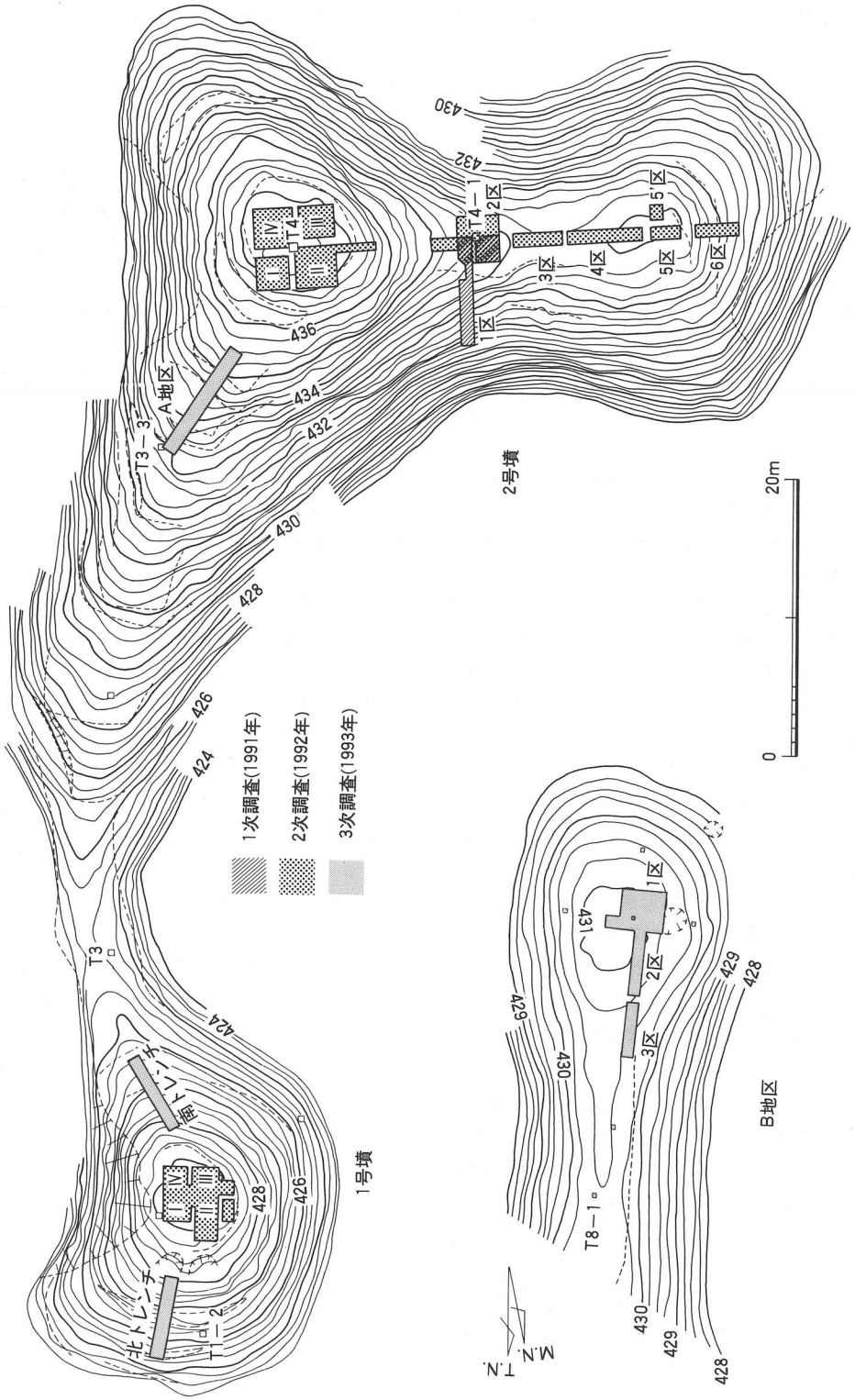
8月25日（水）　3区平面図・断面図を作成。1.2区の出土状況などを確認し、シートで覆い、補足調査に委ねる。

補足調査　（1994年）

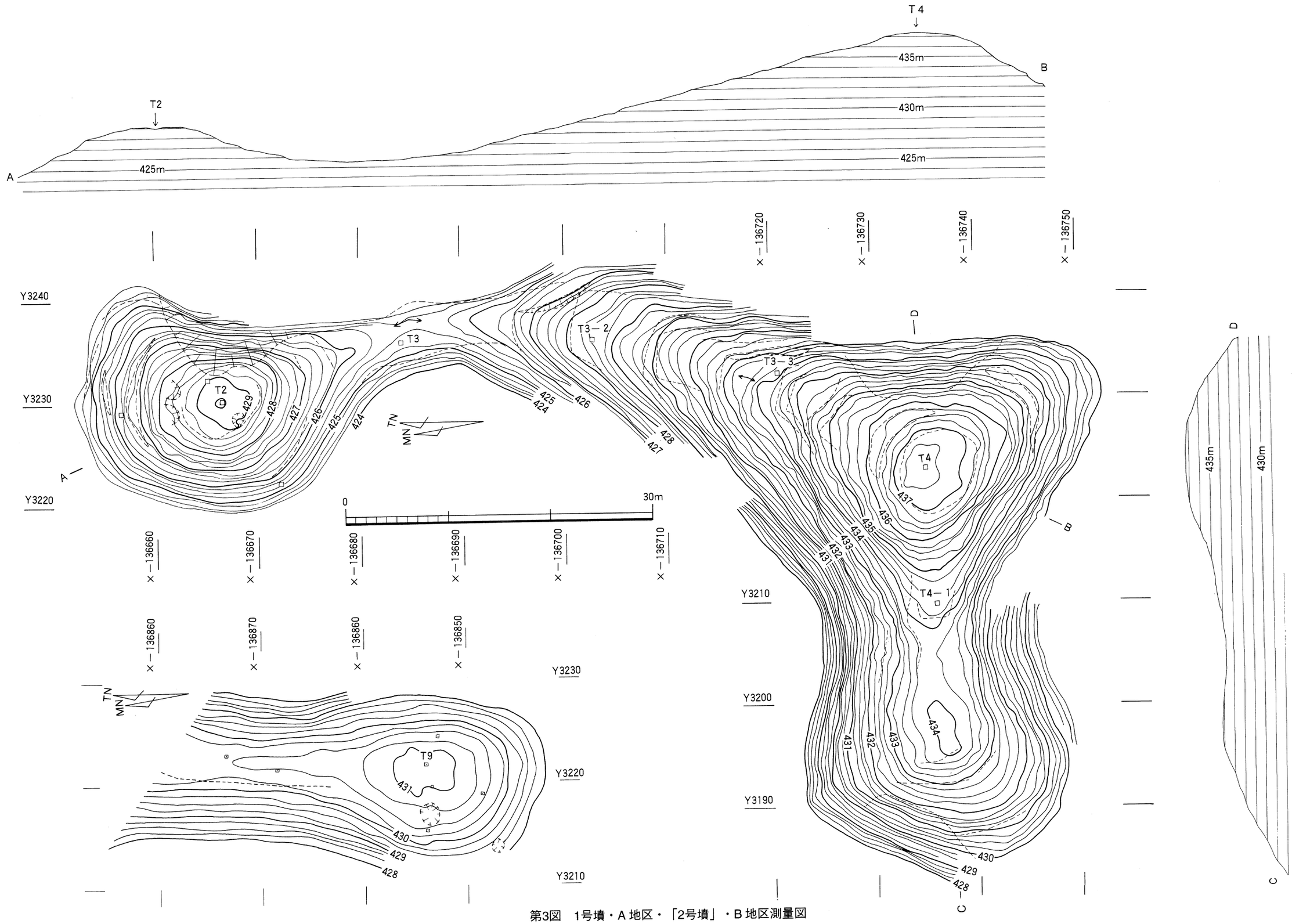
3月 2日　3区の補足実測を行う。

3月29日　1区の鉄器出土状況などを写真撮影・実測し、取り上げる。完掘状況の写真と実測を行い、以上にてB地点の調査を終了する。

（大谷　晃二）


1号墳
2号墳
B地区
A地区
北トレンチ
南トレンチ
T1－2
T3
T3－3
T4
T4－1
T8－1
1区
2区
3区
4区
5区
6区
I
II
III
IV
424
426
428
430
431
432
434
436
429
T.N.
M.N.
0
20m
1次調査(1991年)
2次調査(1992年)
3次調査(1993年)

第2図　調査区配置図



第3図　1号墳・A地区・「2号墳」・B地区測量図

2、調査の成果

(1) 1号墳

a)発掘前の観察

1号墳は最初の踏査時には円形の墳丘と判断され、測量調査においてその形態がさらに追認された。古墳の東側は後世に崩落したことが等高線の状況からわかる。墳頂平坦面は直径約8 mであり、中央部がやや凹んでいる。斜面部では、不明瞭ながらわずかな傾斜変換点が北側で425.5 mと426.75 m、西側で425.5 m、南側で426.25 mから427 m付近に認められた。これらを見かけの墳端とすると、北側の上下いずれをとるかでややかわるが、直径17～20 m、高さ2.5～3.5 mとなる。また、北側の425.5 mの傾斜変換部を墳裾とすると、上の426.75 mは段築成を推定させる。葺石や土器などは確認されなかった。

b)墳　丘

このように、墳丘裾が不明瞭で、段築の存在さえ推定される状態であったため、その確認のため、南北2ヶ所にトレンチを設定した。

南北両トレンチともに表土下には、20～30cmほどの流土があり、その下で地山を検出した。北トレンチで427.05 m、南トレンチで427.00 mで地山の傾斜変換点が認められた。南北ほぼ同じレベルであり、これが墳端と考えられる。墳丘はすべて地山を削り出すことによって成形されており、盛土はなかった。また、後述の墳頂の調査区でも盛土は認められなかった。

葺石、埴輪、土器などは検出されなかった。

T 2杭を中心として先の墳端を円で結ぶと直径約15 mとなる。段築の存在は認められない。

以上より、1号墳は、直径15 m、高さ2 mの円形の墳丘で、築成方法はすべて地山削り出しによるものである。

c)主体部

墳頂部の調査区では、ほぼ並列する3基の墓壙と土器と砥石を確認した。墳頂部には盛土などはなく、墓壙はいずれも地山面から掘り込まれている。墓壙間には切り合いは認められない。このうち中央墓壙のみを完掘し、他は墓壙の検出面で止めた。

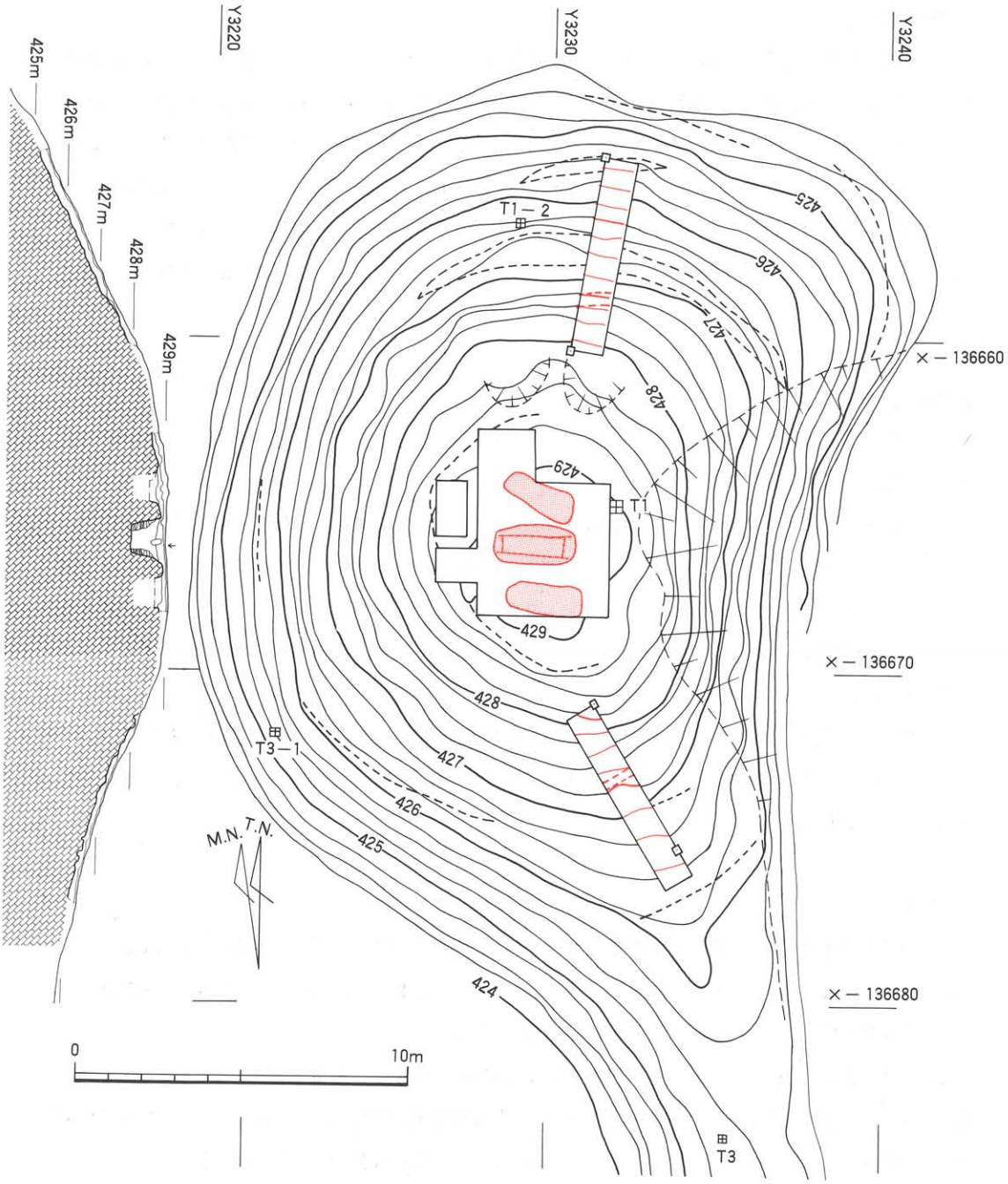
墓壙の配置は、墳頂平坦面中央に中央主体が、これに平行して南主体があり、中央主体と軸を30°振って北主体が並ぶ。3基の墓壙はいずれも東側が幅広であるため頭位方向はすべて東向きと判断される。以下、北主体、南主体、中央主体、土器・砥石の出土状況の順に記述する。

北主体

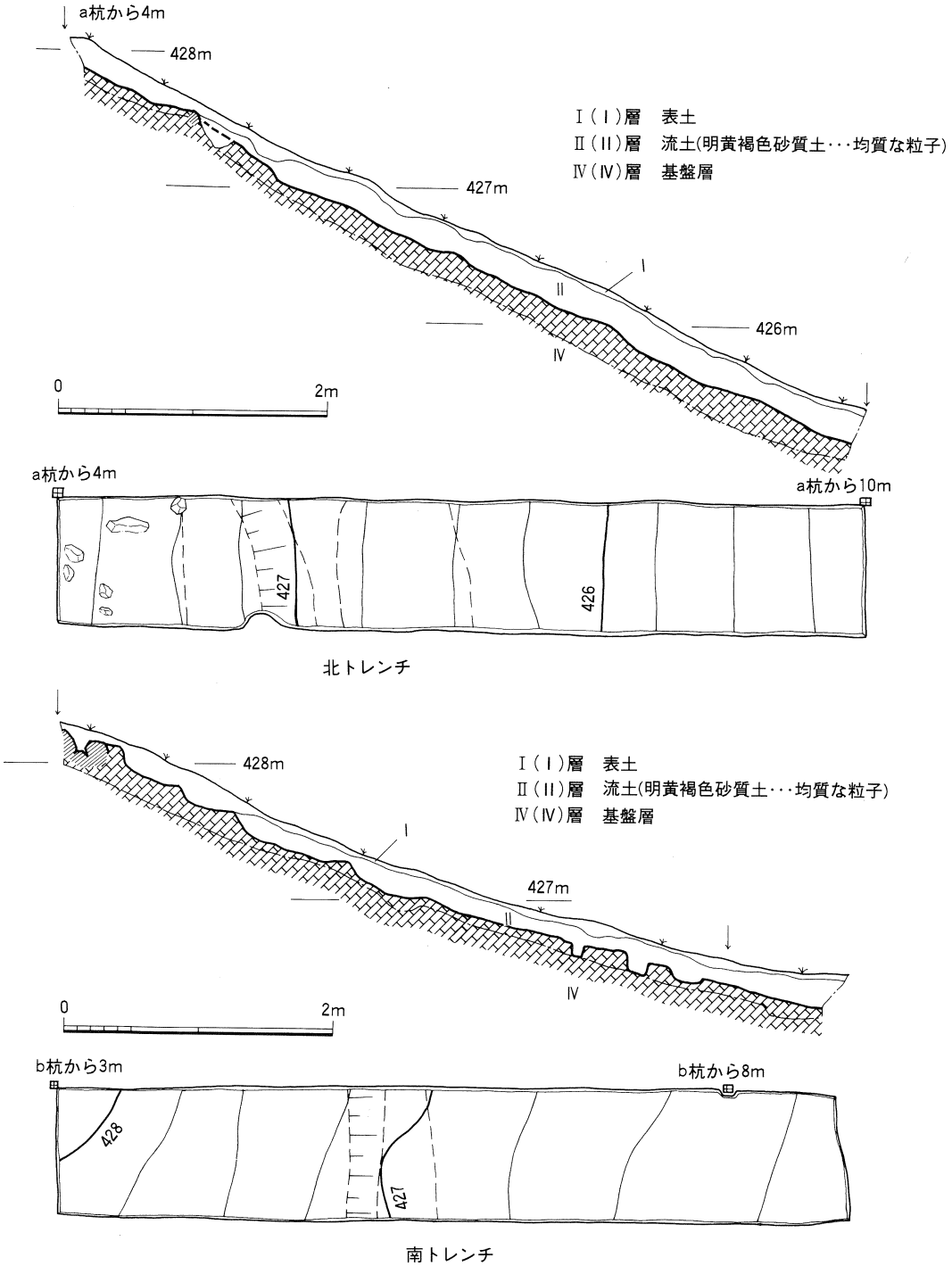
検出面で墓壙はいびつな楕円形のような長方形である。長さは2.26 m、幅は東より0.9 m、西よりで0.7 mである。

南主体

検出面で墓壙は隅丸方形であるが、西側は丸くなっている。長さは2.24 m、幅は東小口で0.9



第4図　1号墳発掘成果図（S=1/200）

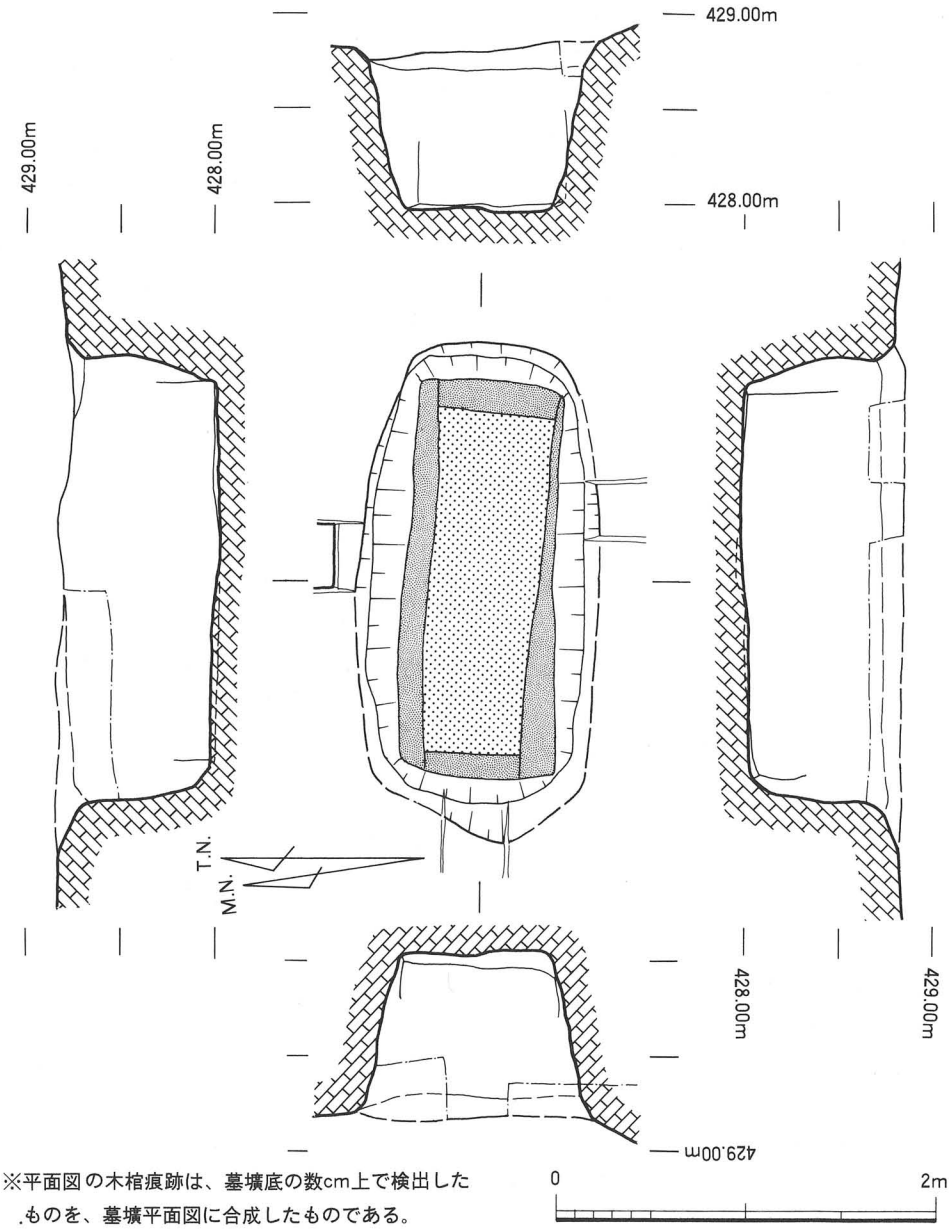


第5図　1号墳墳丘トレンチ実測図（S=1/50）

m、西よりで0.8 m である。

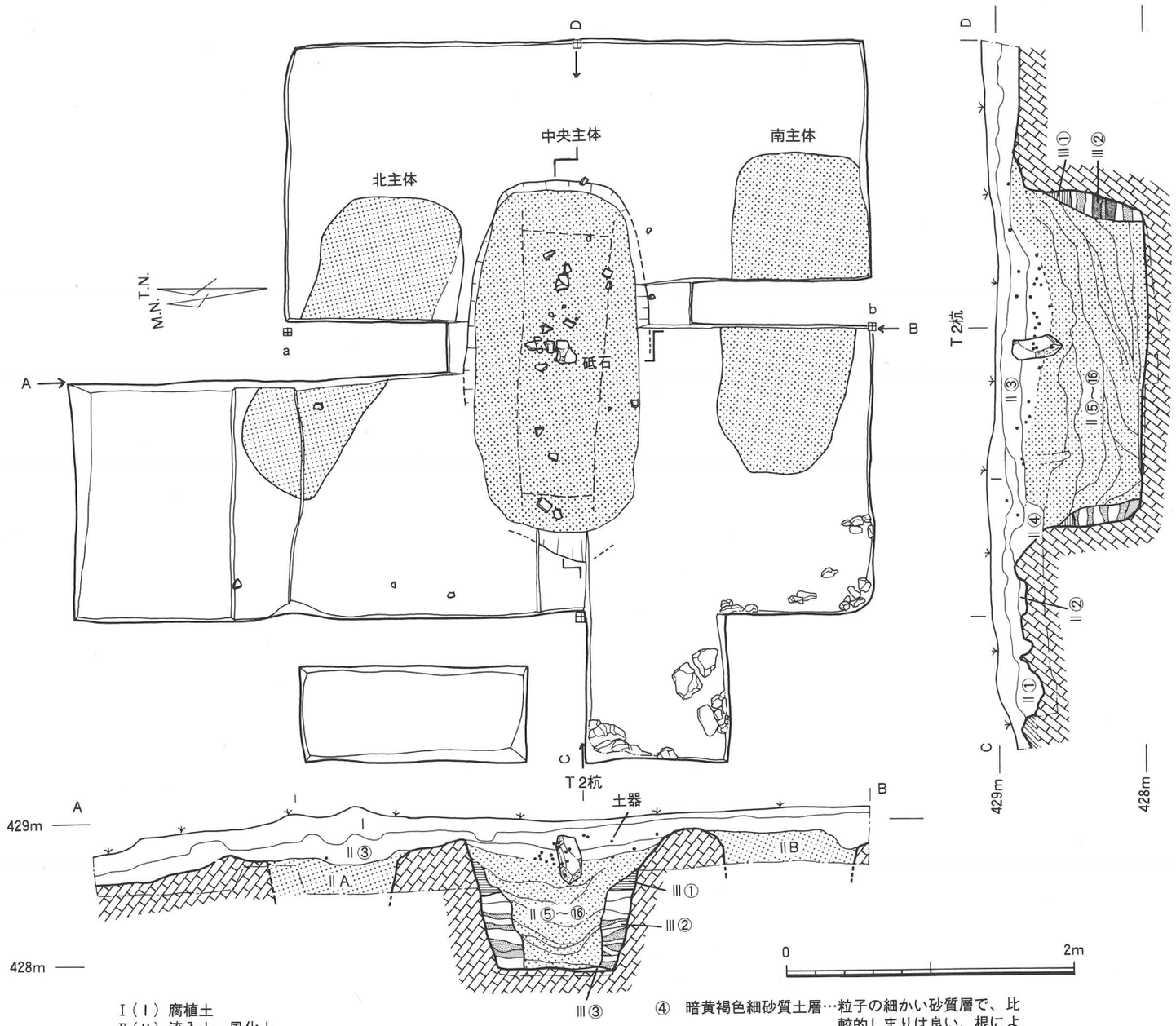
中央主体

木棺直葬である。墓壙は、上面が楕円形に近い隅丸方形、墓壙底はしっかりした長方形のもので、垂直に近い逆台形に掘り込まれている。底部はゆるくわずかな凹凸はあるがほぼ水平である。規模は上面で長さ2.4 m、幅1.3 m、深さ0.84 m、墓壙底で長さ2.1 m、東小口幅0.8 m、西小口幅0.82 m を測る。



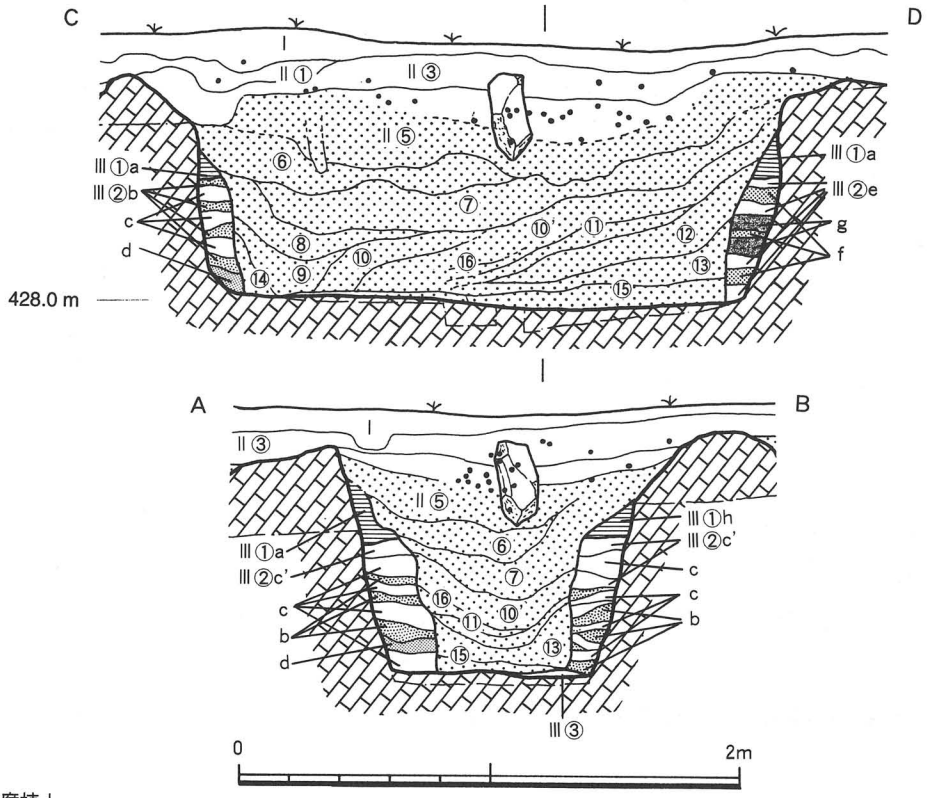
※平面図の木棺痕跡は、墓壙底の数cm上で検出したものを、墓壙平面図に合成したものである。

第6図　1号墳中央主体実測図（S=1/40）



Ⅰ（Ⅰ）腐植土
Ⅱ（Ⅱ）流入土・風化土
A　明赤褐色砂質土層…１～２㎜の砂粒を多く含む。しまり有り。
B　明赤橙褐色砂質土層…白色粒子まばらに含む。
①　暗褐色粗砂質土層…粒子粗く、しまり極めて悪く、ぽろぽろしている。
②　暗黄褐色粘質土層…粒子細く、よくしまる、均質な層。
③　明褐色粗砂質土層…粒子粗く、Ⅱ①層に同じであるが、Ⅱ①層よりもよくしまっている。
④　暗黄褐色細砂質土層…粒子の細かい砂質層で、比較的しまりは良い。根による攪乱を受けたものか？または、それに加えて埋土の差であるのか？
⑤～⑯　中央主体流入土…詳細は第８図
Ⅲ（Ⅲ）墓壙内埋土
①　棺蓋上の墓壙内埋土…詳細は第８図
②　棺側の墓壙内埋土…　〃
③　墓壙底の置土…　〃

第7図　1号墳主体部実測図（S=1/40）



Ⅰ(Ⅰ) 腐植土

Ⅱ(Ⅱ) 流入土・風化土

① 暗褐色粗砂質土層…粒子粗く、しまり極めて悪く、ぼろぼろしている。

③ 明褐色粗砂質土層…粒子粗く、Ⅱ①層に同じだが、Ⅱ①層よりもよくしまっている。

⑤ 淡黄褐色粗砂質土層…1～2㎜の砂粒が多く、しまりあり。根などの攪乱を多くうけ、黒色の縞模様あり。この層の上半に土器を含むことから、さらに分層できるかもしれない。

⑥ 淡赤黄褐色砂質土層…白色の粒子を多く含む。よくしまる。

⑦ 赤褐色粗砂質土層…1～2㎜の砂粒、地山の赤色・黄色の粒子を多く含み、白色の粒子もⅡ⑥層ほどではないが、まばらに含む。

⑧ 明赤褐色砂質土層…白色粒子をわずかに含む。

⑨ 明赤褐色粗砂質土層…黄・橙・赤色の地山ブロック（5㎜位）を含み、全体に赤みが強い。

⑩ 暗黄褐色砂質土層…地山の黄色ブロックを全体に含む。しまりが悪い。

⑩' 暗黄褐色粗砂質土層…Ⅱ⑩層よりも粒子粗く、赤みが強い。しまり良い。

⑪ 明黄白白砂質土層…白色・橙色の粒子を含む。

⑫ 赤褐色粗砂質土層…Ⅱ⑦層に似るが、黄白色のブロックをまばらに含む。

⑬ 暗赤褐色粗砂質土層…色の砂粒を多く含み、しまりなし。

⑭ 暗褐色微砂質土層…粒子は比較的細い。黒色ににごった感じの色調。しまりなし。

⑮ 明赤黄褐色細砂質土層…白色粒子やブロックを含まない。均質な層である。初期流入土か。

⑯ 明赤褐色砂質土層…白色粒子をまばらに含み赤みの色調が強い。

Ⅲ(Ⅲ) 墓壙内埋土

① 棺蓋上の墓壙内埋土

a 黄褐色粘質土層…均質な粒子で、大きな砂粒などない。しまりがない。

h 暗赤黄褐色細砂質土層…b・cなどより粒子細かい。ブロックなど含まない。しまり堅く、aと異なる。

② 棺側の墓壙内埋土

b 明赤褐色砂質土層…均質な粒子でブロックなど含まない。白色粒子もなし。ややしまる。

c 暗黄褐色砂質土層…1～2㎜の砂粒をまばらに含む。

c' 〃 …c層よりも砂粒の含みがやや少ない。

d 暗赤褐色砂質土層…b層に似るが、やや暗い。

e 淡黄褐色砂質土層…粒子は比較的細かい。部分的黄色ブロックを含む。

f 明赤褐色砂質土層…白色粒子を含み、しまりなし。

g 暗赤褐色砂質土層…赤色などのブロックを含む。ややしまる。

③ 墓壙底の置土

赤桃褐色粘質土層…きたないピンク色。地山の赤色土が混入したもの。

第8図　1号墳中央主体土層断面図（S=1/30）

断面および平面の土層観察により、木棺の痕跡を確認することができた。横断を見ると、わずかにくぼんだ墓壙底の南半に4cmの赤桃褐色粘質土（Ⅲ③層）を敷き、ここに木棺を置く。木棺の周囲の埋め土は黄褐色土と赤褐色土がほぼ交互に堆積している（Ⅲ②層）。この互層状の堆積は墓壙底から50cmの高さまで見られ、その上には黄褐色粘質土ないし暗赤黄褐色細砂質土（Ⅲ①層）がある。この土は、互層を構成する土と異なるもので、その下面が標高428.5 m とほぼそろうことから、ここに墓壙埋め戻しの工程差を想定することができる。つまり、互層状の上面（Ⅲ①層の下面）が、木棺側板の上端（木棺蓋下面）のレベルであると推定される。これにより木棺の高さは約50cm（ただし蓋の厚さは含めない）と考えられる。以上の所見を復元的に示すと、第9図のようになる。

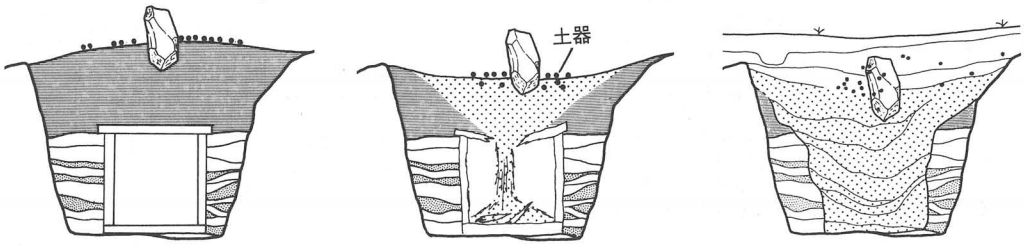
墓壙底から数cmのレベルで木棺痕跡を面的に探索したところ、小口側と側板側で第7図のように埋土に差が認められた。これにより木棺は小口板を側板で挟む形式のものであると判断され、木棺の平面規模を知ることができた。以上の知見から木棺の規模は、小口間の長さ184cm、側板長さ202cm、北小口幅62cm、西小口幅50cm、高さ50cm（蓋の厚みは含めない）となる。頭位は東向きである。

この互層状の墓壙埋土の内側には、木棺の腐朽により陥没・流入した土（Ⅱ⑤～⑯層）が堆積する。

土器・砥石の出土状況

中央主体直上からは、長さ約35cmの角礫が直立した状態で検出され、その周囲から土器片が散在した状況で出土した。この角礫には3面の砥ぎ面があり、砥石として使用されたものである。この砥石は墓壙の中央に位置し、陥没した流土の上部にあり、本来は墓壙埋め戻し後、地表に露出していたものと考えられる。

この砥石が本来から直立していたものか、それとも倒置してあったものが木棺の腐朽による陥没に伴い直立したものなのかが、問題となる。そこで、砥石下半分の土層断面を精査し、掘り方の検出に務めたが、ついにこれを認めることができなかった。しかし、これによって、砥石が墓上に直立していた可能性を否定することはできない。つまり、その土層はすべて木棺腐朽に伴い陥没したものであるため、それによって掘り方の観察が困難になったとも考えられるし、墓壙の埋め戻しに平行して砥石を立てたとも考えられるからである。今回の調査では、砥石の本来の状



①木棺を置き、周囲を埋め、地表に土器を散布　②木棺の腐朽によりⅢ①層が棺内に流入　③完全に陥没し、表土が形成される

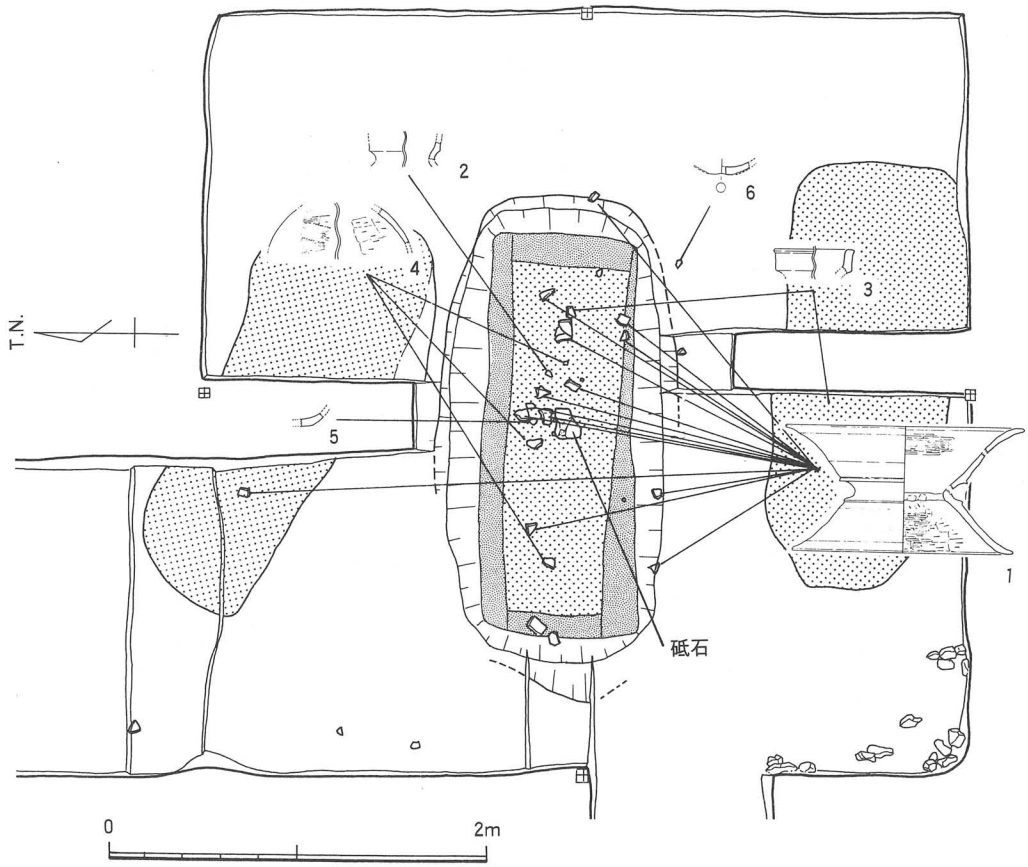
第9図　1号墳中央主体横断面土層の形成過程復元図

況をいずれとも決することはできなかった。

土器はこの角礫を中心とし、主として中央墓壙上面の範囲から出土した。他にも北主体上や南主体上からも出土しているが、胎土、色調などから中央主体と同一個体のものと判断してよい(第10図)。確認できた器種は、鼓形器台1個体分（第12図—1)、壷2個体分(2種類の口縁部による。第12図—2・3)、壷ないし甕形土器の胴部1～2個体(1個体のみ図化（同—4))、底部2個体（同—5・6）がある。

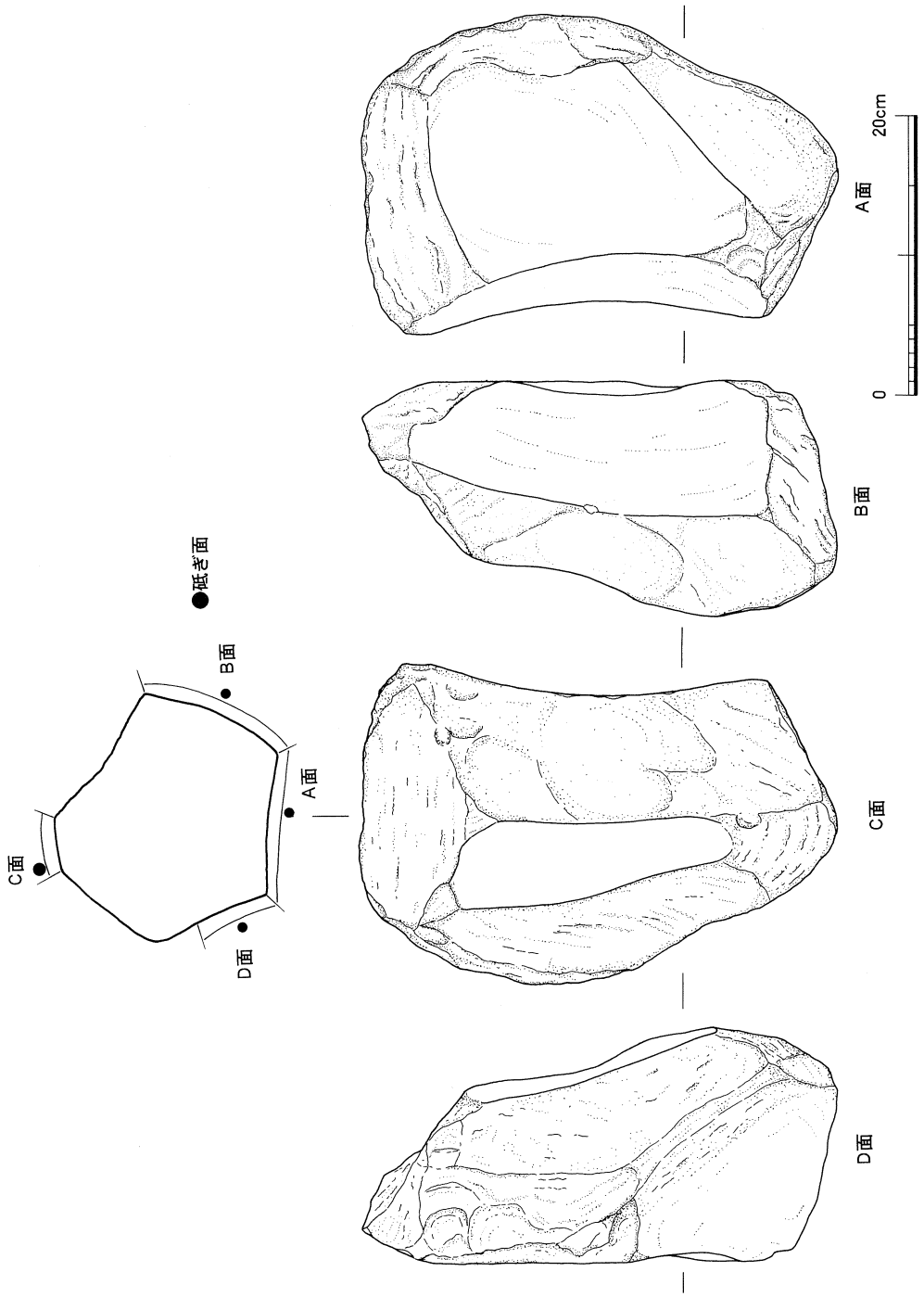
いずれも細片であり、最大でも7 cm 程度、大半が5 cm 以下のものである。壷・甕形土器よりも鼓形器台の破片の方が比較的大きく、破片点数も多い。鼓形器台では、受部片は土器表面の風化が著しいのに対し、脚部片は比較的遺存が良好である。

これら本来の状況については、中央主体上に完形で供献されていたものが自然崩壊し流出した場合と、当初から破砕し散布されていた場合の2つが考えられた。安来市長曽土壙墓群では完形の甕形土器と鼓形器台1セットがその場でつぶれて出土した（第23図—2）のに対し、千年比丘1



第10図　1号墳出土土器の分布（S=1/40)

号墳ではその場でつぶれた状況の破片がまったくなく、細かい破片が完全に散らばっていた。さらに、壷・甕形土器は各個体が2～5cm程度の細片が3片程度しかない。こうした状況から考えて、本来から破砕・散布されたものと判断される。北主体上の土器片はそれが後に流出したものであろう。



第11図　1号墳中央主体出土の砥石実測図（S=1/5）

なお、先に述べたように、破砕された破片の内、鼓形器台の破片が壷・甕形土器のそれよりも遺存状態が良好な点は、破砕のありかたを考える上でも注意すべき点である。

d)遺　物

1号墳から出土した遺物は、中央主体上から出土した砥石1と鼓形器台1個体分、壷2個体分(2種類の口縁部による)、壷ないし甕形土器の胴部1～2個体(1個体のみ図化)、底部2個体、器種・個体不明の小片若干のみである。墳丘からの出土品や中央主体に副葬品などはなかった。以下、砥石、土器の順に記述する。

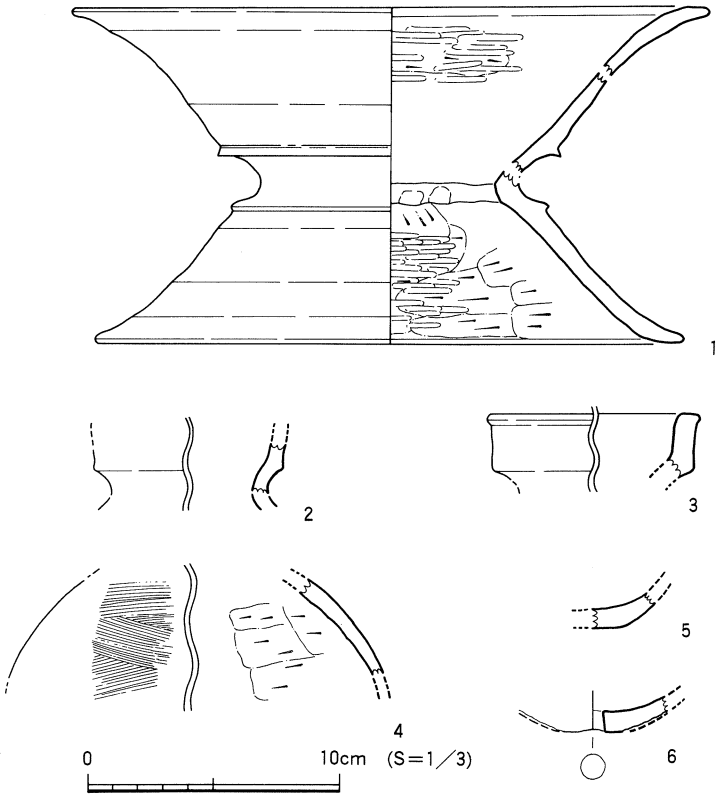
砥石（第11図、PL 15-(1)）

最大長34.5 cm、幅20 cm を測る大型のものである。3面（第11図A～C面）に明瞭な砥ぎ面をもつ。さらにD面にも滑らかな部分があるが、他の3面に比べるとやや粗い。A面は長さ22 cm、幅14 cm を測り、中央が凹む。これに対し、B面は長さ26 cm、幅9.5 cm、C面は長さ19 cm、幅5.5 cm で、ともに長軸は大きく凹むが、その横断は凸面をなす。D面は全体がゆるい匙面をなしている。

土器（第12図、PL 13～14）

約30片の小片が出土しており、器種が識別でき、図示できたのは、第12図に示した6点である。

1(PL 13)は、鼓形器台で、細片であるが、一個体分ある。受部と脚部はわずかに外反しつつもほぼ直線的にのびる。筒部は短く太い。筒部と脚部の接点の突出は側面に鈍く突出する「側隆型」であるが、受部との接続部は斜め下向に鋭く突出する。外面はすべてナデ調整で、特に脚部外面は強いナデによりその痕が明瞭に残る(PL 13-(2))。受部と脚部内面はと



第12図　1号墳出土土師器実測図

もにヘラケズリ後ヘラミガキを施すが、ヘラケズリの痕跡が明瞭に観察でき、丁寧なヘラミガキとは言えない。筒部内面はヨコナデである。高さ13.5㎝、受部口径25.5㎝、脚部裾径23.5㎝、筒部最小径10.3㎝を測る。

2 (PL 14–(1)2) は、壷ないし甕形土器の口縁部の小片であり、口径は復元できない。二重口縁になるものであるが、口縁端部を欠く。内外面ともにヨコナデ調整を施し、凹線や沈線など見られない。色調は淡黄褐色、焼成は普通で、胎土はやや密である。

3 (PL 14–(1)3–1・2) は、壷ないし甕形土器の口縁部の小片であり、口径は復元できない。口縁部は短く真上に延び、端部をわずかに外面に屈曲させる。内外面ともにヨコナデ調整を施し、凹線や沈線など見られない。色調は淡橙色、焼成は普通で、胎土は1～2 mmの砂粒を含みやや粗い。

4 (PL 14–(1)4–1・2、(2)) は、壷ないし甕形土器の胴部の破片である。外面に刷毛目、内面ヘラケズリを施す。色調は暗黄褐色であるが、やや密な胎土や焼成の具合から、2の口縁部と同一個体の可能性が高い。

5 (PL 14–(1)5)は、壷ないし甕形土器の底部の小片である。外面は風化し調整不明だが、内面はナデ調整による。色調・焼成・胎土は4に同じで、同一個体の可能性が高い。

6 (PL 14–(1)6、(3)) は、直径1 cmの焼成前穿孔を施した小片である。穿孔部周辺が特に厚くなり、さらに強い曲面をもつことから、壷などの底部の可能性が高いと思われる。色調は淡橙色、焼成は普通で、胎土は1～2 mmの砂粒を含むなど、3の口縁部に似るものである。

e)小　結

以上の調査成果をまとめると、1号墳は直径15 m、高さ2 mの円墳であり、その築成はすべて地山削り出しによる。葺石、埴輪はもたない。埋葬施設は、墳頂部に3基あり、中央主体は木棺直葬である。

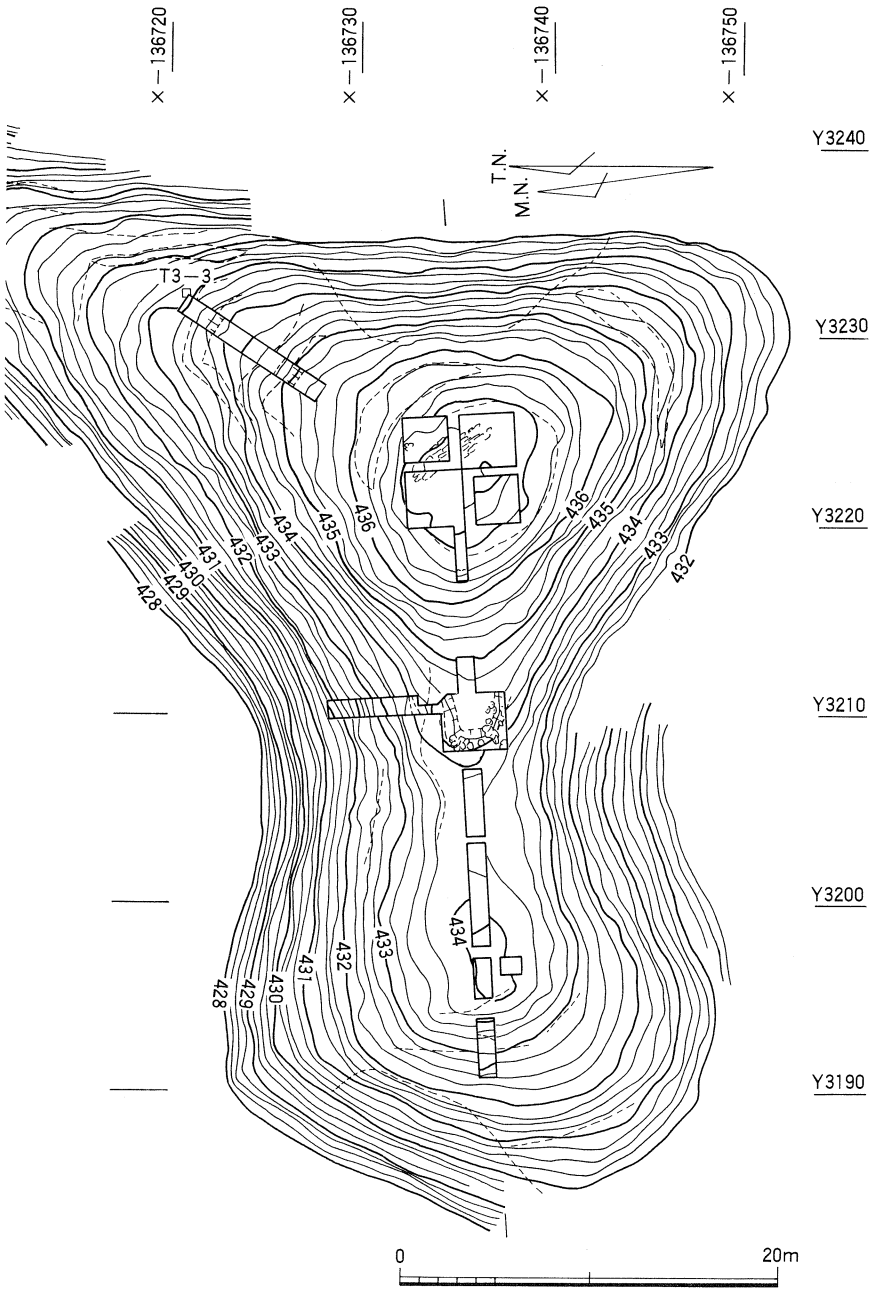
その時期は、中央主体直上から出土した鼓形器台から考えることができる。この器台は、出雲地方の器台と比較しても遜色ない造りのもので、類似資料としては、島根県東出雲町大木権現山1号墓、安来市小谷土壙墓出土資料がある。千年比丘1号墳出土器台は、出雲地方で弥生時代末の墳丘墓や古墳時代初頭の古墳から出土する器台に類似する。従って、千年比丘1号墳は弥生時代末から古墳時代初頭の築造であると言う事ができる。では、これが弥生墳丘墓であるか、前期古墳であるかについては、土器編年のみでは、にわかに決しがたい。ただ、先の類似資料の2例のうち、千年比丘1号墳出土器台は、筒部のくびれ具合や脚部の傾きなどが小谷土壙墓出土資料により近い点と、弥生墳丘墓で円形の墳丘を持つものが極めて少ない山陰において千年比丘1号墳が円形墳丘である点から、現状では、これを前期初頭の古墳として位置付けておきたい。

(2) その他の墳墓、遺構の確認調査

a)A 地区の調査

踏査時、1号墳と「2号墳」の間の尾根上には段状の施設の存在がみられ、尾根を段状に加工した墳墓の存在が推定された。測量調査の結果、段は明瞭にコンターに表現されるほどのものではないが、5段を確認することができた。最高所は435mにあり、これを第1段として以下第2～5段と呼ぶ。規模はいずれも幅4～6m、長さ4m程度のものである。あまり明瞭な段とは言えず、発掘調査により確認することとした。

発掘区は、第2段の調査を意図してT3-3杭からT4-6を通る幅1m、長さ8.8mのトレンチを設定した。表土および若干の流土を除去するとすぐに地山が検出した。434.3mと433.7mに傾斜変換点が認められ、



第13図　A 地区・「2号墳」発掘成果図

わずかな傾斜をもつテラスが検出された。テラス上面は長さ3.5 m を測る。溝、土壙、ピットなど遺構は検出されなかった。テラスの南端、434.3 m 付近の傾斜変換点は明瞭なものではない。自然地形としても不自然であるが、明確な人為的加工の跡を見いだすこともできなかった。

遺物は出土しなかった。

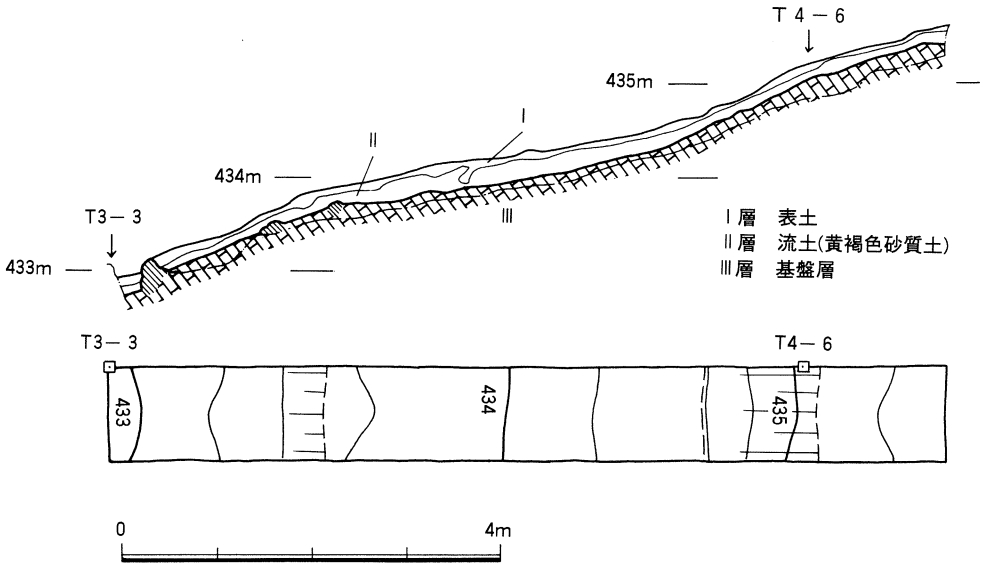
b)「2号墳」の調査

1号墳の南の高まりは、現地踏査によって40 m 級の前方後円墳の可能性が考えられた。1次調査では詳細な形態を知るために測量調査と「くびれ部」の一部発掘を行った。その結果、全長約40 m の前方後円墳か、または造り出しをもつ直径約20 m の円墳の可能性が考えられた。

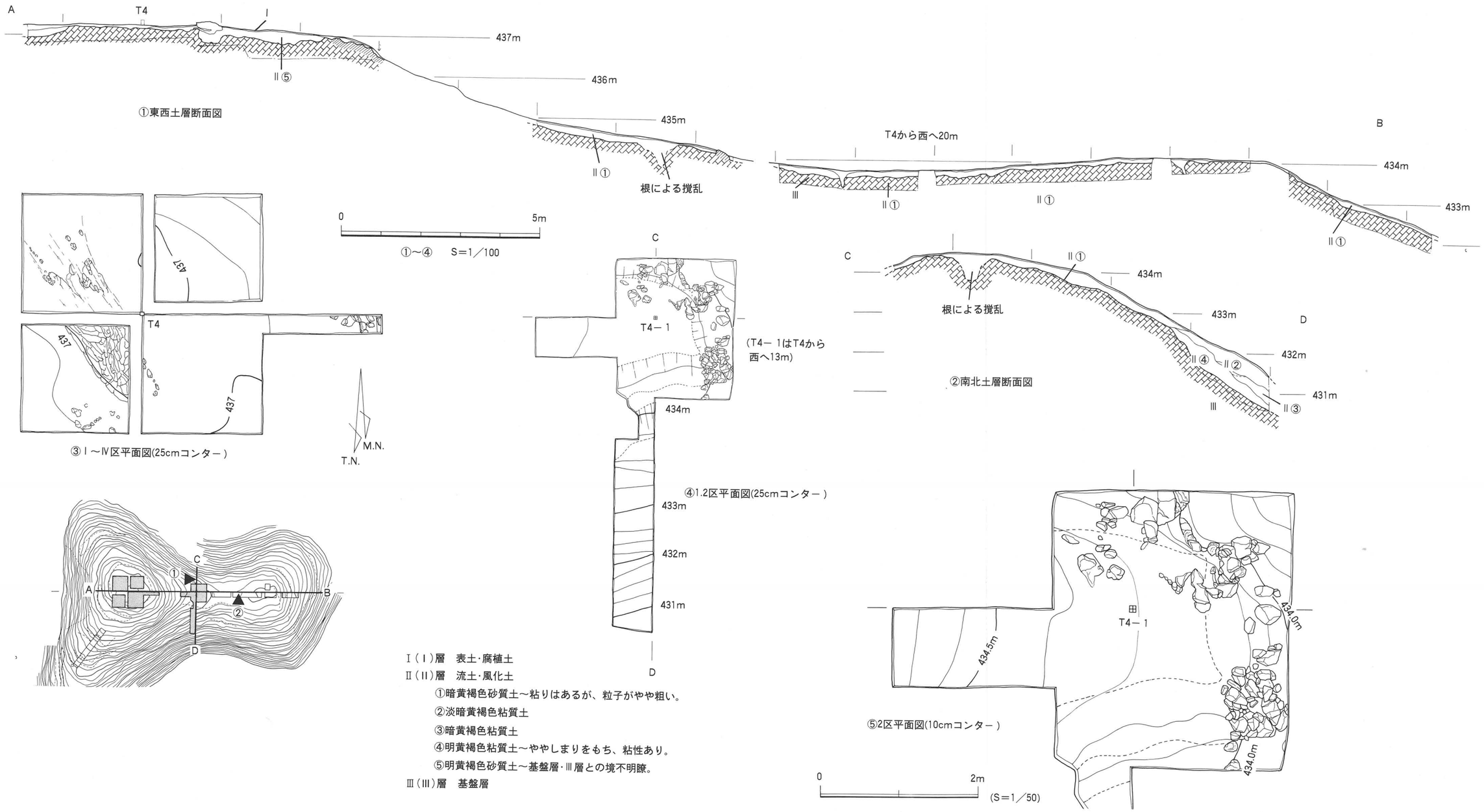
前方後円墳とする見方は、前方部前端を433 m 付近に求め、後円部裾を南側434.5 m に見るものである。その場合、全長約40 m、後円部墳頂平坦面は直径約8 m、後円部高さ2.5 m、前方部高さは1 m を測る。前方部上面は幅約4～6 m の平坦面をなし、前方部前端側がわずかに高くなっている。また、後円部北側には後述のA 地区につながる段状遺構がある。後円部頂から前方部へはゆるやかなスロープ状を呈し、比高差は3 m と大きい。

一方、円墳と見ると、先の後円部の部分がこれに相当し、前方部へのスロープと見た西側の434 m 付近を造り出しとみる。この場合、直径約20 m、高さ3 m、造り出しの長さ4 m を測る。

こうした調査前の観察を検証するために、発掘調査を行った。調査の結果は、明確な人為的加工の跡を認める事はできず、自然地形と判断するに至ったが、記述の便宜上以下、「後円部」、「くびれ部」など、かっこ付で調査地点を呼称を行いたい。



第14図　A 地区トレンチ実測図（S=1/80)



Ⅰ(Ⅰ)層　表土・腐植土

Ⅱ(Ⅱ)層　流土・風化土

①暗黄褐色砂質土～粘りはあるが、粒子がやや粗い。

②淡暗黄褐色粘質土

③暗黄褐色粘質土

④明黄褐色粘質土～ややしまりをもち、粘性あり。

⑤明黄褐色砂質土～基盤層・Ⅲ層との境不明瞭。

Ⅲ(Ⅲ)層　基盤層

第15図　「2号墳」調査区実測図

「後円部」墳頂（Ⅰ～Ⅳ区）は、埋葬施設の有無を確認する目的で設定したが、表土下ですぐ地山が検出された。東半分には北西から南東方向に岩脈が走り、西半は風化した基盤層である。また、断ち割りによって、いくつかの土壙状の落ち込みを検出したが、平面形が不整形で、土層断面も地山との境界が漸移的で不明瞭であった。従って、これらの落ち込みは、すべて木の根などによる風化・撹乱された地山であると判断された。従って埋葬施設など人工的なものは認められなかった。

「くびれ部」には、「墳裾」の遺構の有無を確認するために「墳丘」主軸に直交するトレンチの1区と、「造り出し」状の高まりの性格を確認するため、2区を設定した。1区の南半部では、表土と若干の流土を除去し地山を検出した。434.1 m の部分に「造り出し」状の高まりの北辺にあたる段が確認された。また、この下433.6 m でさらに段が検出され、「前方部」側面の墳裾の可能性が考えられた。ただし、これらの段はいずれもゆるやかで明瞭なものとは言えない。これより下、調査区北半部は急傾斜で下降し、厚い流土が堆積する。

2区では表土と若干の流土を除去し、コの字形の地山の高まりを検出し、西辺と南辺に人頭大から拳大の角礫を検出した。礫は、造り出し状の高まりの外には見られず、あたかも造り出し斜面に貼られた葺石のような状況であった。しかし、礫全体を検出し精査したところ、礫同士は大きな亀裂でつながっており、礫の分布が南東から北西方向へ続く状況であり、墳頂部の岩脈の方向と一致することが判明した。従って、これは貼られたものでなく、岩脈であることが明らかになった。

「前方部」前端にあたる6区には、表土と流土の下で地山が検出された。432.95 m のところで若干の傾斜変換点が認められたが、明瞭なものではなかった。

「前方部」上の4区と5区は、「前方部」が「後円部」とは別な遺構の可能性を想定して設定した。しかし、表土下で地山が検出され、遺構、遺物ともにまったく検出されなかった。

5区と7区は、「前方部」上の遺構の有無を確認するために設けたが、やはり表土下で地山が検出され、遺構、遺物はまったく検出されなかった。

以上の調査区からは遺物は一点も出土しなかった。こうした明確な遺構がなく、遺物も皆無である点から、「2号墳」は古墳または人工的な加工が施されたものではない自然地形であると判断された。

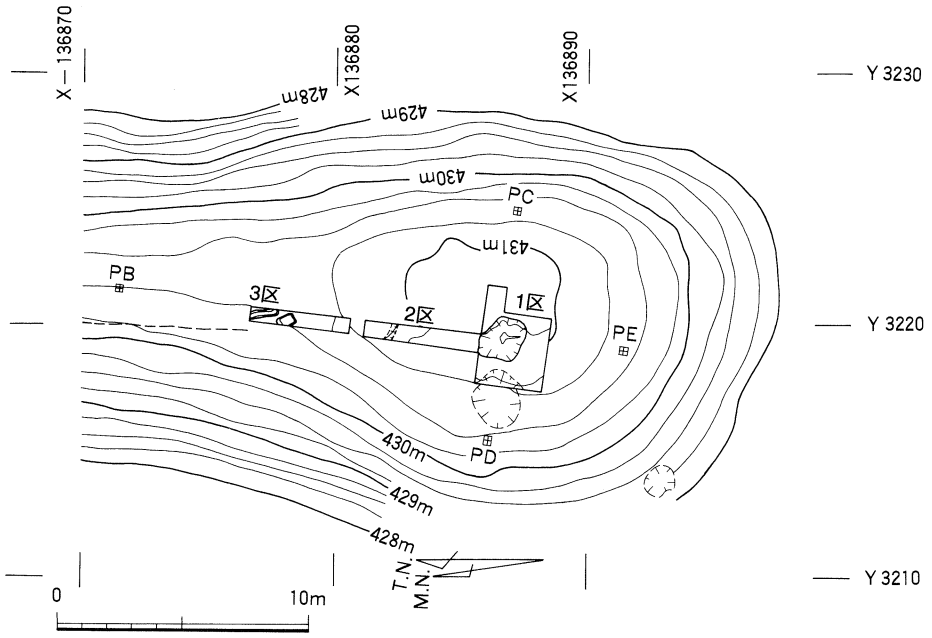
c)B 地区の調査

千年比丘丘陵の南端のこの地区は、発掘前の踏査によって、最南端に直径約15 m、高さ50㎝ほどの高まりが認められた。その北側には幅4 m、長さ40 m にわたって平坦な地形が認められ、南端の高まりが低墳丘の墳墓ではないかと思われたため、これを発掘により確認することにした。

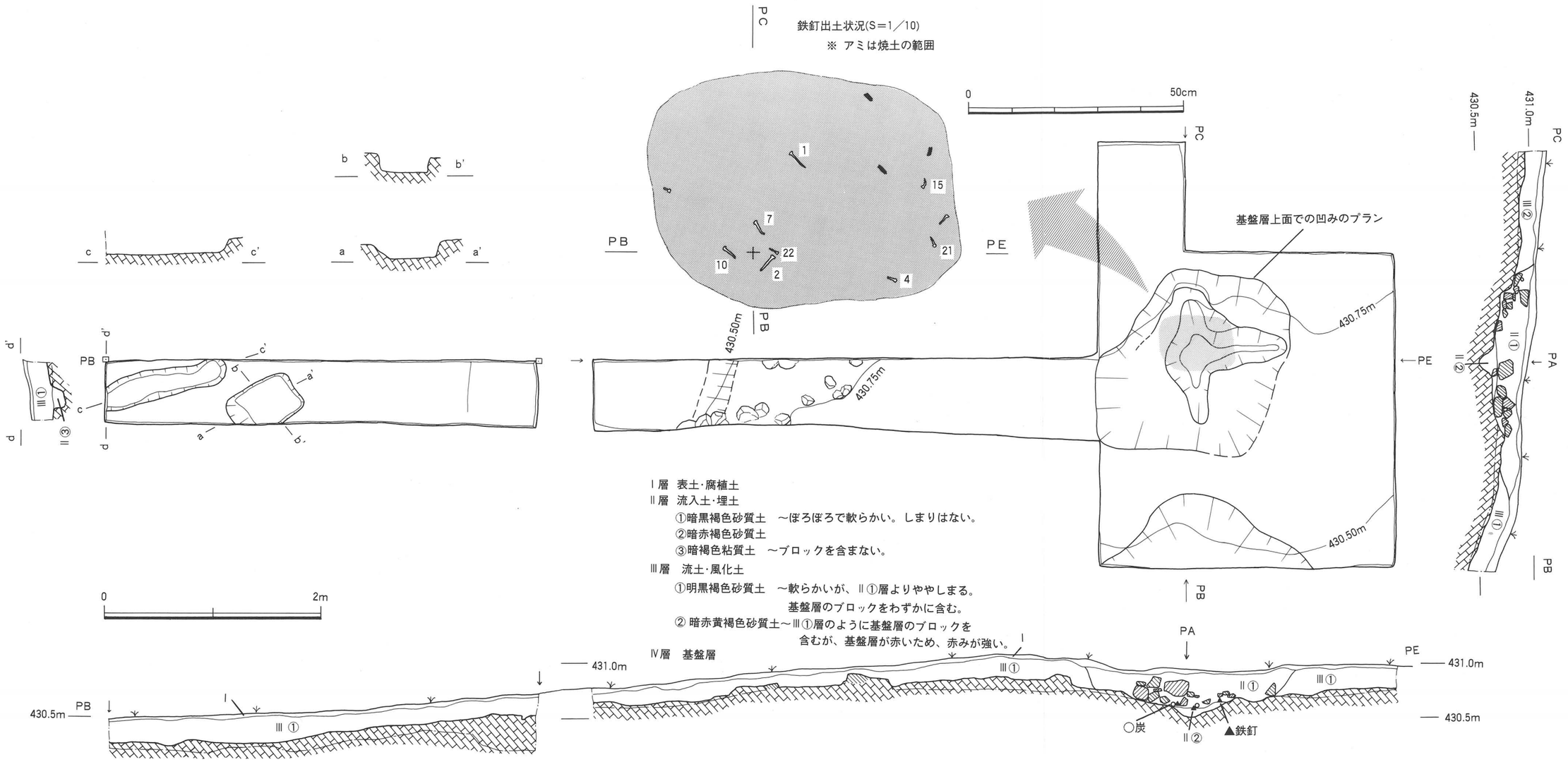
まず、高まりの中央部に発掘区を設けた(1区)。高まりの中心からやや西によった位置に、腐植土下から掘り込まれた1.9×2.1 m の不整形の土壙があり、その中に、焼土と角礫、鉄釘を検出した。この土壙は、腐植土直下から地山まで掘り込まれている。土壙底中央には長さ1.1 m の溝状の窪みがある。これを埋める暗赤褐色砂質土（Ⅱ②層）があり、その上面に50×70㎝の範囲で焼土が認められた。この焼土の上に鉄釘が散在した状況で21本出土した。これを覆って人頭大から拳大の角礫が多数検出された。この角礫は土壙外でも若干検出された。

また、この高まりの北端をおさえるため、北側へ幅0.6 m、長さ4.5 m(2区）とさらにその北へ幅0.6 m、長さ4 m(3区）の2本のトレンチを設定した。先述の焼土を検出した土壙から北へ4 m の付近からゆるやかな傾斜を検出した。この傾斜はそのまま3区でもだらだらと続き、南端の高まりを区画するような加工は認められなかった。この高まりの3区北半との比高差は地山面で55 cm を測る。

3区北よりでは、45×65㎝の方形の土壙と、幅25㎝長さ110㎝の溝状の落ち込みが検出されたが、人為的なものか木の根などの撹乱によるものか判然としなかった。



第16図　B 地区発掘成果図（S=1/30)

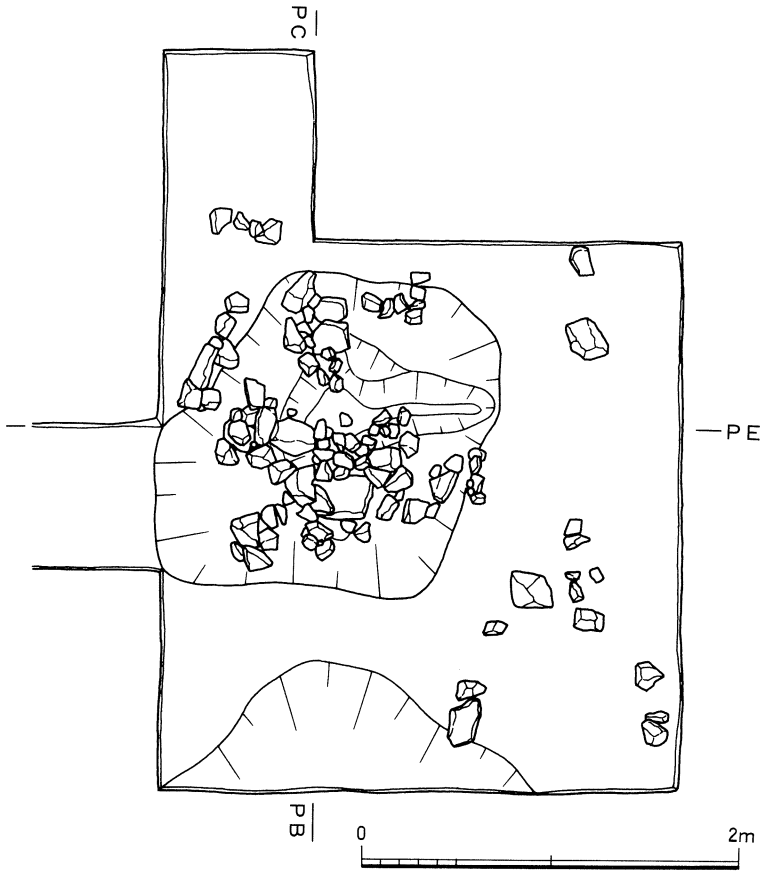


第17図　B地区調査区実測図（S＝1/40）（平面図は基盤層上面のコンター及び遺構検出プラン）

1区から出土した鉄釘（第19図）はすべて角釘であり、頭は釘の端部を折曲げて作り、方形をしている。長さ4 cm から2 cm 弱まで幅があり、これによって4つに分類することができる。1類は長さ4 cm と最も大きなもの(1～3)。2類は長さ3 cm 前後のもの(7・10・11)。3類は2.5～2 cm のもの(16・19・20)。4類は2 cm 以下のもの(21・22)である。

以上のように、B 区では南端の高まりの中央をややはずれた位置で焼土壙を検出した。その使用状態を復元的に考えてみると、焼土壙や鉄釘の大きさから考えて鉄釘で留めた小さな箱状のものを焼いたと思われる。これに伴って多数の角礫を何等かの形に配置したであろうが、その状態はわからない。その後、これをかたずける過程で礫が散乱したものであろう。その性格として、まず思い付くのは火葬等の関連遺構であるが、骨片などこれを証明する遺物は皆無であった。その時期は、この土壙が腐植土直下から掘り込まれていること、釘が丸釘でなく角釘であることなどから、近世ないし近代前半ではないかと思われる。

（大谷　晃二）



第18図　B 地区礫検出状況（S=1/40）

3、総　　括

今回の３次にわたる調査の結果、千年比丘の丘陵で原始・古代の墳墓が確認できたのは、丘陵先端に位置する１号墳のみであった。以下、この１号墳の調査結果が提起する二三の問題について触れておきたい。

(1)　1号墳

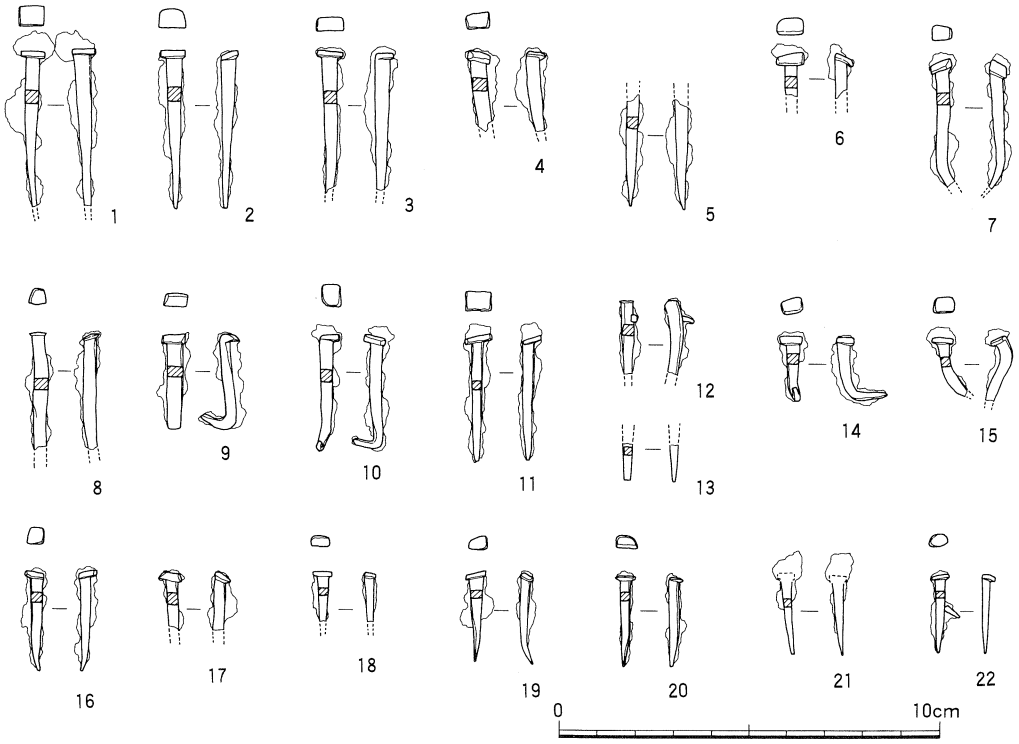
a)概　要

１号墳の概要を再度まとめると、

①墳丘は、直径15ｍ、高さ2ｍの円墳で、その築成はすべて地山削り出しによる。葺石、埴輪はもたない。段築もない。

②埋葬施設は、墳頂部に３基あり、中央主体は木棺直葬である。他の２基は墓壙プランの検出にとどめ、内部の発掘は行っていない。３基の墓壙はいずれも地山から掘り込まれており、墓壙間に切り合いは認められないため、埋葬順序は不明であるが、その配置から中央主体→南主体→北主体の順と推定される。

③完掘した中央主体は木棺直葬であり、木棺の構造は小口板を長側板ではさむタイプのもので



第19図　Ｂ区出土鉄釘実測図（S=1/2)

ある。木棺の規模は、土層観察により小口間の長さ184㎝、側板長さ202㎝、北小口幅62㎝、西小口幅50㎝、高さ50㎝（蓋の厚みは含めない）である。頭位は東向きである。副葬品などは皆無であった。

④中央主体直上からは砥石１個と鼓形器台１個体分、壷２個体分（２種類の口縁部による）、壷ないし甕形土器の胴部１～２個体（１個体のみ図化）、底部２個体、器種・個体不明の小片若干が出土した。これらの土器は破砕・散布された状況を呈していた。

b)時　期

その時期は、中央主体直上から出土した鼓形器台から考えることができる。この器台は、出雲地方の器台と比較しても遜色ない造りのもので、類似資料としては、島根県東出雲町大木権現山１号墓、安来市小谷土壙墓出土資料がある。千年比丘１号墳出土器台は、出雲地方で弥生時代末の墳丘墓や古墳時代初頭の古墳から出土する器台に類似する。従って、千年比丘１号墳は弥生時代末から古墳時代初頭の築造であると言う事ができる。

では、これが前期古墳であるか、つまり、千年比丘１号墳が畿内における前方後円墳を築造した首長との関係またはその影響下に築造されたものであるのか、それともそれ以前のもの、例えば、出雲においてなお四隅突出型墳丘墓が造営されている時期のものであろうか。

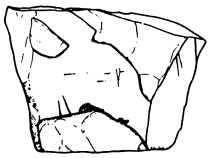
この点については、石見におけるこの時期の詳細な土器編年の確立を待たねばならないが、現状では以下の２点からこれを古墳であると判断した。まず１点は、鼓形器台について先の類似資料の２例のうち、千年比丘１号墳出土器台は、筒部のくびれ具合や脚部の傾きなどが小谷土壙墓出土資料により近いということ。２点目は、弥生墳丘墓で円形の墳丘を持つものが極めて少ない山陰において千年比丘１号墳が円形墳丘であるということである。

c)墓上祭祀

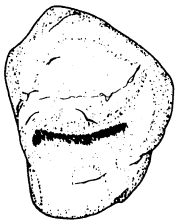
１号墳中央主体の上面には、１個の砥石と破砕散布された土器が検出された。こうした状況は、墓上祭祀の痕跡を示すものであるが、以下、この類似例を紹介して千年比丘１号墳の墓上祭祀の位置付けを検討したい。

まず、その使用した土器の器種は、鼓形器台１個体分、壷２個体分（口縁部破片による）、壷ないし甕形土器の胴部１～２個体（１つのみ図化）、底部２個体、器種・個体不明の小片若干のみである。細片であるため、個体数などの限定は困難であるが、復元的に類推してみると、鼓形器台１個、これとセットになる壷又は甕１個、他地域系の壷又は甕１個、さらに底部穿孔した土器１個（器種不明だが甕か？）。他に若干の小片があるが、上記資料と同一個体の可能性もあるが、別個体としても１ないし２個であろう。

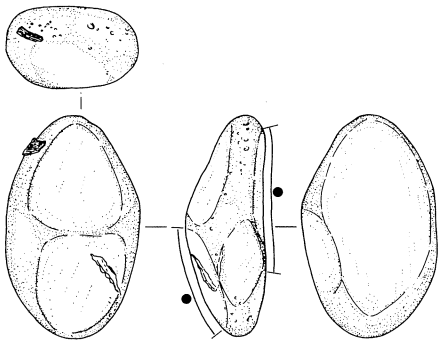
さらに、ここで注目されるのが、砥石の存在である。山陰では出雲地方を中心に１ないし２個の礫が土器溜から出土することが多い（第1表・第22図）。これらの中には単なる礫ではなく、



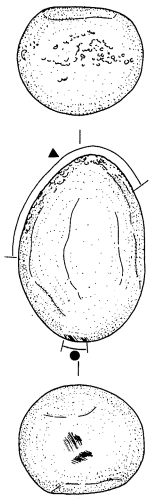
18．安来市長曽19号土壙墓
（永見1981より）



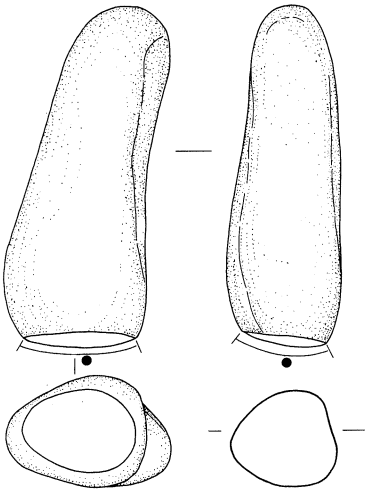
17．安来市長曽６号土壙墓



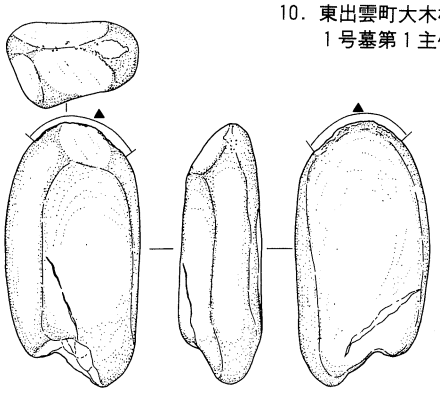
14．安来市小谷（古墳）第１土壙墓



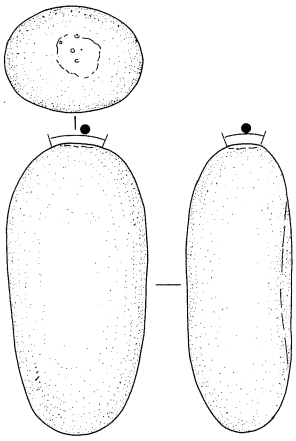
10．東出雲町大木権現山
１号墓第１主体



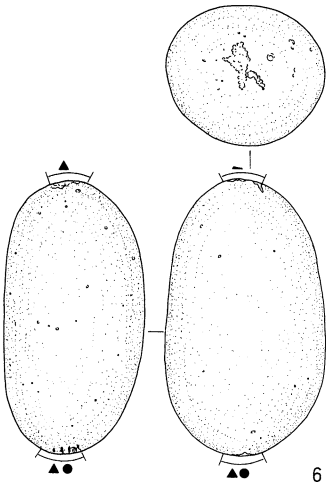
11．安来市安養寺１号墓第１主体



11．安来市安養寺１号墓第１主体

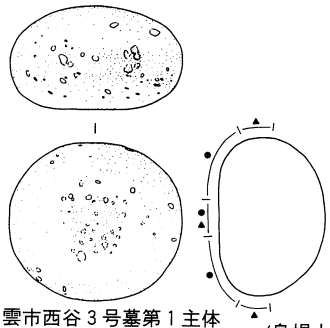


12．安来市安養寺１号墓第２主体



9．松江市的場土壙墓（墳丘墓）

▲打痕跡　●磨痕



6．出雲市西谷３号墓第１主体
（島根大学
1992より）

0　10cm

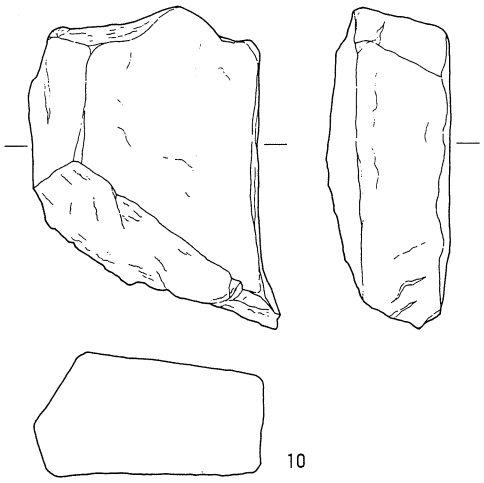
第20図　弥生時代後期から古墳時代前期の墓壙上出土の礫(1)　(S=1/4)

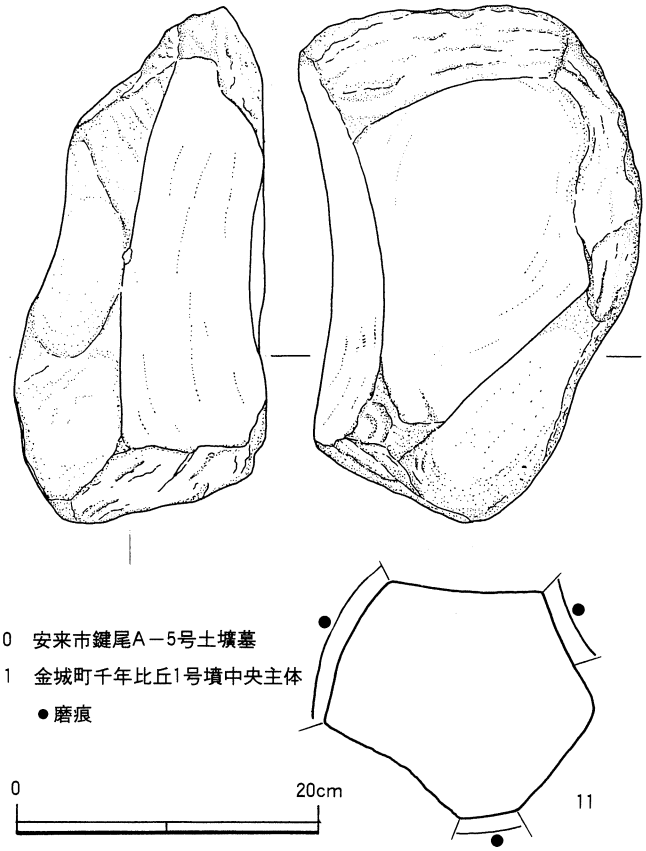
らかな使用痕をもつ礫、つまり石器であることが確認されたものが少なからずある（第20図）。

安来市長曽6号土壙墓では完形の甕形土器と鼓形器台1セットがその場でつぶれて出土し、その横に磨痕をもつ不整形の円礫が置かれていた（第20図17）。また、安来市長曽19号土壙墓は、溝で区画された中の中心主体であるが、その上部から鼓形器台2個体と甕1個体とともに砥石1個（第20図18）が出土している。

安来市小谷（古墳）では並列する2基の木棺直葬のうち、大型の第1墓壙上面の土器溜りから長さ12 cm、厚さ4 cmの偏平な礫が出土している。極めて滑らかな面を作っており、磨痕が観察される。打痕は見られない（第20図14）。

東出雲町大木権現山1号墓では、主体部上の土器溜りの中から長さ10 cm、厚さ6 cmの河原石状のもの（第20図10）で、その一端に打痕があり、反対側に磨痕が観察される。





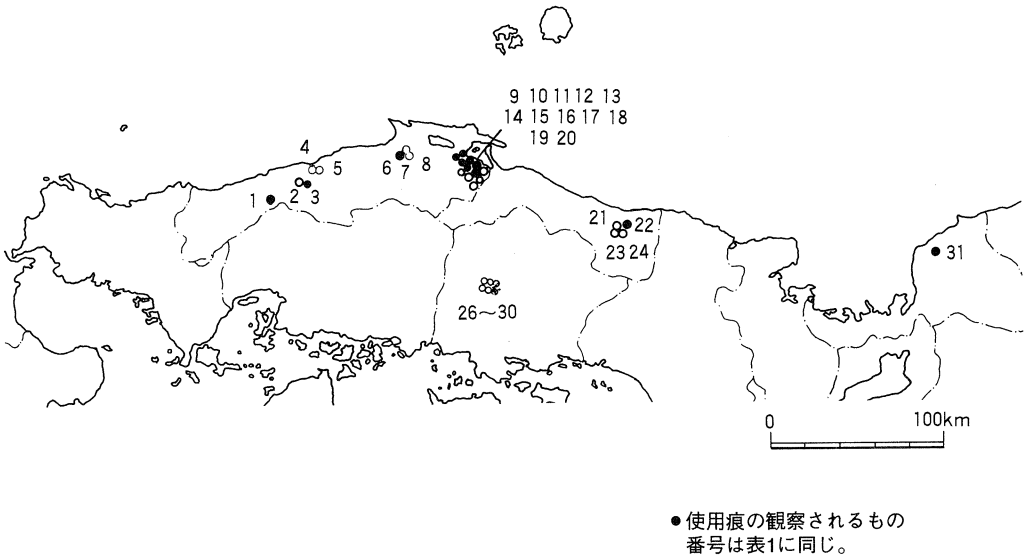
第21図　墓壙上出土の礫(2)　(S=1/5)

第1表　弥生時代後期から古墳時代前期の主体部上に礫を置く墳墓

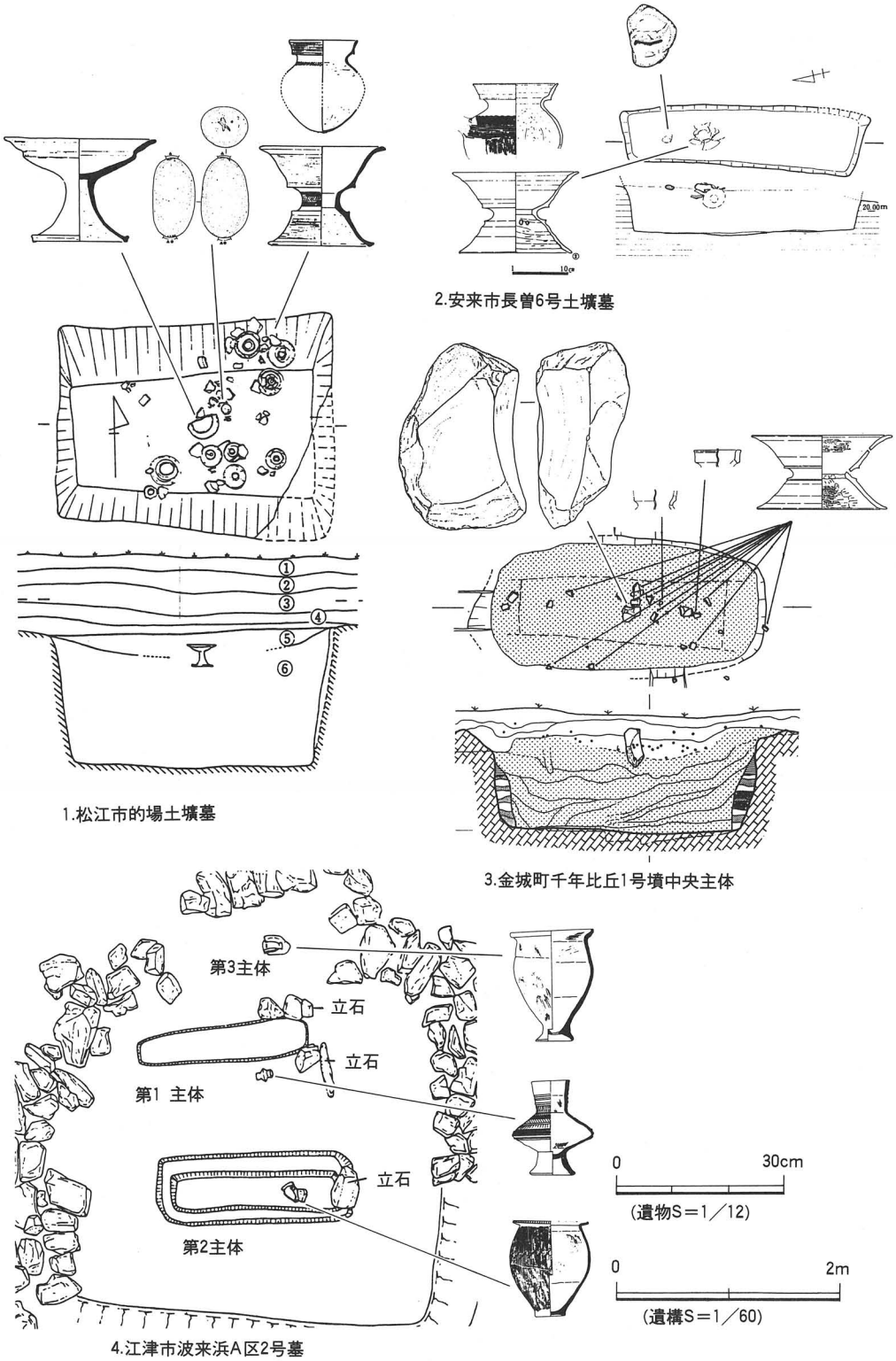
	遺　跡　名	墳　丘	礫の形状と使用痕	礫等の出土状態	副　葬　品	時期
1	島根県金城町 千年比丘1号墳第1主体	● (径18 m)	砥石（角礫で3面に砥ぎ面）	墓壙中央に直立		大木式～小谷式
2	島根県石見町 湯谷悪谷土壙墓		板状の大形河原石	土器の直上		
3	島根県石見町 中山B地区 SX 12			土器片に混じり土壙上面ほぼ中央		
4	島根県江津市　波来浜 A区2号墓第1主体	□ (4×5)	角礫「墓標石」	墓壙東寄り。もともとは垂直に立つ		
5	〃 第2主体		角礫「墓標石」	墓壙東端部で倒れた状態で検出		
6	島根県出雲市 西谷3号墓第1主体	■ (40×30)	円礫、 擦痕・敲打痕	土器溜（100)中央・最下部	ガラス小玉・勾2・碧玉管玉、朱玉	的場式
7	〃 第4主体主棺		円礫	土器溜（100)中央・最下部	碧玉管玉、鉄剣、朱床	的場式
8	〃 第4主体副棺		礫		朱床	的場式
9	島根県松江市 的場土壙墓（墳丘墓）	□ (8×8)	「棒状の礫」(20×7㎝)、敲打痕あり	土壙ほぼ中央、土器溜中央に直立		的場式
10	島根県東出雲町　大木 権現山1号墓第1主体	■？ (23×12)	「拳大の卵形河原石」、擦痕あり	土器溜最下部	不明	大木式
11	島根県安来市 安養寺1号墓第1主体	■ (20×16)	棒状の礫2個、各々擦痕・敲打痕	土器溜内、棒状礫の1個直立・1個横転	朱床	大木式
12	〃 第2主体		棒状の礫1個擦痕あり	土器溜内、直立		大木式
13	島根県安来市 鍵尾A区5号土壙墓	□	長方形の割石 (20×15㎝)	土壙ほぼ中央部、土器溜内		鍵尾A–5式
14	島根県安来市 小谷古墳第1墓壙	□？ (20×20)	「偏平礫」(12×6㎝)、擦痕あり	〃　、土器溜内	内行花文鏡1、刀子	小谷式
15	島根県安来市 中山第Ⅱ土壙墓		「石塊」1個	約1 mの範囲の土器溜のほぼ中央		大木式～小谷式
16	島根県安来市 九重3号土壙墓		「割石」2個	土壙中央部、土器溜の両側		九重式
17	島根県安来市 長曽6号土壙墓		「置　石」、「擦痕」あり	土壙短辺より		鍵尾A–5式
18	島根県安来市 長曽19号土壙墓	□(3.5×3.5)	「砥　石」1個、割石	破砕された土器の上に割石		鍵尾A–5式
19	島根県安来市　島田黒谷Ⅲ遺跡Ⅴ区 SK–01	□？ (13×13)	「偏平な河原石」(32×30㎝)	土器溜の中央に直立		大木式～小谷式
20	島根県伯太町 カウカツE–1号墓	■（6.5×11.4)	「長方形の板石」(27×20㎝)	土器溜内	不明（未調査）	立板型
21	鳥取県鳥取市 桂見1号墳第1主体	□ (22×20)	板状河原石 (45.2×34㎝)	墓壙中央、鉄剣・鉄鏃・炭水化物	ガラス小玉6、ガラス管玉4	古墳前期

22	鳥取県鳥取市 桂見2号墳第1主体部？	□ (28×22)	板状河原石・擦痕・水銀朱付着「石杵」		内行花文鏡、斜縁獣帯鏡、鉄刀1、刀子1、ヤリガンナ1	古墳前期
23	鳥取県鳥取市 東桂見 SX-03		河原石	墓壙中央に直立、器台片含む		九重式
24	〃 東桂見 SX-05		河原石	高坏・壷片に隣接		弥生後期
25	岡山県御津町 みそのお35号墓第4主体	□（11.3×6.8)	石（径30cm）	高坏を伴う		才の町Ⅰ
26	〃 みそのお35号墓第5主体		石	供献土器を伴う		才の町Ⅰ
27	〃 みそのお35号墓第1主体	□ (8×4.8)	大形の石	供献土器を伴う	管玉1、赤色顔料	才の町Ⅱ
28	〃 みそのお35号墓第6主体		多数の石	供献土器を伴う	鉄器片1	才の町Ⅱ
29	〃 みそのお40号墓第1主体	□ (7×6.5)	大形の石（40cm）	少量の土器を伴う	赤色顔料	才の町Ⅱ
30	〃 みそのお40号墓第2主体		石（30cm）	供献土器を伴う		才の町Ⅱ
31	福井県清水町 小羽山30号墓	■ (26×22)	蛤刃石斧	土器溜（20～30個）下面、石斧下にガラス管玉1	ガラス管玉10、ガラス勾玉1、碧玉管玉103、鉄鏃1	法仏式

（凡例）遺跡名　（　　）番号は、本文末の引用文献の番号に同じ。
墳　丘　●円墳
■四隅突出型弥生墳丘墓　　□方形区画、方形の墳丘墓、方墳など。
時　期　山陰の例の「○○式」とは、代表的な土器資料との併行関係を示したものである。
●使用痕の観察されるもの　番号は表１に同じ。



第22図　弥生時代後期から古墳時代前期の墓壙上に礫をおく墳墓の分布図



第23図　墓壙上の礫の出土状況

安来市安養寺1号墳丘墓第1主体では、主体部上の土器溜りから2個の礫が出土している。一つは長さ18 cmの棒状で全体が滑らかであるが、特に一端は磨り減って平坦になっており、一見して石杵のような用途を想像させるものである（第20図5）。これに隣接して出土したもう一つの礫は、長さ14 cm、厚さ4 cmで先のものよりも自然面の凹凸が著しいが、その一端に打痕が観察される（第20図6）。

この第1主体に隣接する第2主体からも土器溜りの中から長さ15.5 cm、厚さ5.5 cmの礫が出土しており、一端に磨痕が認められる（第20図7）。

松江市的場墳丘墓は、主体部上面中央に長さ14.5 cm、厚さ7.4 cmの楕円形の礫が直立して出土した（第23図1）。一端に打痕が、他方に打痕と磨痕が観察される（第22図8)。

出雲市西谷3号弥生墳丘墓第1主体でも、約100個体の土器集積の最下部に朱の付着した径約9 cmの円礫があり、敲打痕と思われる使用痕が観察されている（第20図9）。また、第4主体上からも同様の円礫が出土している。

石見町中山墳墓群B地区のSX 02、09、10、12などの土壙上面からも礫が出土している。これらは長径9.5 cmほどの楕円形のものから長さ15.5 cm、幅5 cmの棒状のもの、さらには25×24 cm、厚さ4.5 cmの板状のものなどさまざまであるが、先に紹介した出雲地方のものに類似するものもあり、擦痕なども認められるという。

これらの出雲における類例を見ると、安養寺や的場のような太い棒状の礫と小谷や安養寺のように偏平な礫など形態は様々で、端部に打痕や磨痕をもつものやこれが明瞭には観察されないものもあり多様である。しかし、安養寺1号墓第1主体出土のように明瞭な石杵状の形態をもつものを見ると、他もその出土状態の類似性から共通の用途を想定できるのかもしれない。

一方、こうした小形の礫で使用痕をもつものの他に、比較的大型の礫を出土する事例もある。安来市鍵尾A区5号土壙墓では、土器溜りの中に長さ21 cm、厚さ8 cmの角礫が置かれていた(第21図10）。使用痕などは認められない。また、石見町湯谷悪谷遺跡では、土壙直上に置かれた土器の上に大形の偏平な河原石が土器を押しつぶして置かれていた。江津市波来浜A区2号墓では、貼石をもつ4×5 mの墳丘墓の2基の主体部それぞれに頭位側に立石が認められた（第23図4)。調査者はこれを墓標石と呼んでいる。

さて、千年比丘1号墳の事例は、使用痕をもつ石器であるという点では、前者の小形の礫の事例に類似するが、これが大形である点では後者の事例に近いといえよう。前者との比較では、砥石としての用途が認められるものには、安来市長曽19号土壙墓の例があるのみである。また、後者の場合を考えた時、その砥石である点は、単なる転用と評価され、砥石としての機能は墓上祭祀と直接的な関連はないということになる。いずれとも決しがたいが、千年比丘1号墳では、これに出雲通有の鼓形器台と甕形土器がセットで伴う点を考慮すれば、こうした祭祀が出雲での祭祀と極めて共通した内容をもっていたことは認めてよいのではなかろうか。

また、1墳丘に複数の主体部をもつ場合、こうした礫が中心主体と考えられるものに置かれる

のが一般的と言える。小谷古墳では第1土壙がより大型で内行花文倣製鏡を副葬しているし、安養寺1号墳丘墓でも第1主体、第2主体が大型の墓壙である。西谷3号墳丘墓も並列する最大の埋葬施設の第1主体と第4主体に礫が伴う。千年比丘1号墳でのあり方もこれと同じで、中心主体に伴うものである。

(2) その他の調査区

今回の調査では、A地区と「2号墳」では、人為的な加工の痕跡を認めることはできなかったし、遺物も検出されなかった。ただ、A地区については、ゆるやかながら、段状になっており、これが複数段ある点を自然地形としてよいか、なお検討が必要であろう。

また、B地区は、その南端の微高地において近世～近代の火葬関連の施設と類推した焼土壙を検出した。さらに、北側から土壙2基を検出したが、これも木の根の撹乱によるものか否か決しがたい。これ以外の遺構は検出していないため、このB地区を原始・古代の墓域であるとした踏査時の所見は確認できなかった。しかし、南端の微高地の調査区が微高地の中心からはずれていたため、この点でも課題をのこすことになった。

(3) ま と め

今回の調査で、波佐・長田地域における古墳時代の初頭の墳墓の存在が明らかとなった。これまで、原始・古代の墳墓遺跡が未発見であったこの地域において、その確認の意味は大きい。しかも、その中心埋葬上の祭祀が、出雲のものと土器のセット、礫の設置といった点で共通性もつ点も、この被葬者の背景を考える上で重要である。1号墳からは、畿内との直接的な関係をしめす資料は、見られなかったが、隣接する同時代の集落遺跡、七渡瀬Ⅱ遺跡では布留式甕が出土しており、この波佐・長田地域が1号墳の時期に畿内と無関係ではなかったことを証明している。

また、調査において、我々の期待に反した事実もこの地域の原始古代史を検討する上で大きな課題を提起した。その一つは、千年比丘丘陵には、1号墳に前後する墳墓が見られなかったことである。このことはこの地域の首長制社会の成立とこれが継続的・安定的に発展していたのか否かを検討する上で重要な点である。このことは、周辺の分布調査と集落遺跡の継続期間なども加味して今後追求されねばならない。

もう一点は、1号墳の中心主体の副葬品が皆無であったことである。同時期・同規模の出雲の安来市小谷土壙墓が倣製鏡とヤリガンナなどの農工具を持っていたのに対し、1号墳には何もなかった。もちろん副葬品は、絹布などの有機質のものもあろうから、本来副葬品が無いとは言えない。しかし、前期古墳に特徴的な鏡や武器、農工具などの鉄器、玉類などを持っていない点は、その被葬者の波佐・長田地域での首長としての性格と対外関係での立場の特色を反映するものと

して、積極的に評価・説明がなされねばならない。今、それをここで行うことはできないが、石見の前期古墳研究の進展の中でその評価を進めていくべきであろう。

（大谷　晃二）

註・参考文献

1、池淵俊一ほか1994「島田黒谷Ⅲ遺跡」『明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』島根県教育委員会

2、石井悠1979『大木権現山古墳群』東出雲町教育委員会

3、内田才1972「安来・中山遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅳ集　島根県教育委員会

4、内田才・近藤正・東森市良1966「島根県安来市平野における土壙墓」『上代文化』第36輯

5、近藤正・前島巳基1972「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻第4号

9、金井亀喜・小都　隆編1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』広島県教育委員会

10、勝部昭1985「安養寺墳墓群」『荒島墳墓群』古代の出雲を考える4　出雲考古学研究会

15、椿　慎治編1993『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87　みそのお遺跡』岡山県文化財保護協会

16、中村徹・西浦日出夫・小谷修一1992『鳥取市東桂見遺跡・鳥取市布勢鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団

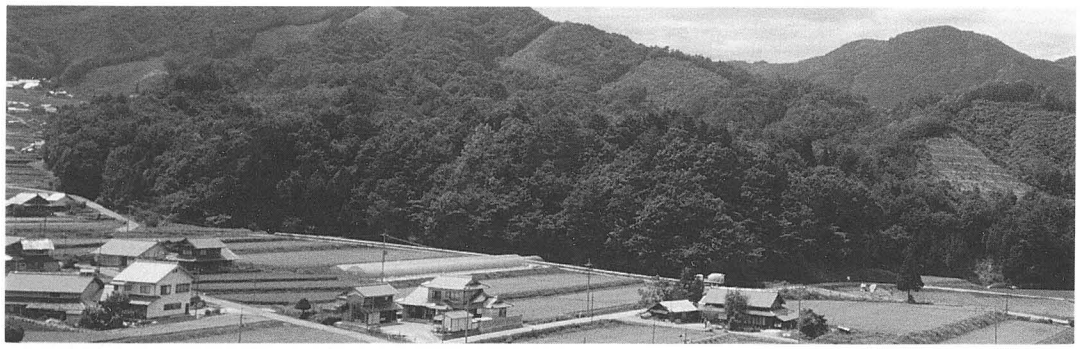
17、永見英1981『安来市黒井田町長曽土壙墓群』安来市教育委員会

18、東森一良・松本哲・妹尾秀樹1992『伯太町安田地内試掘調査報告書』

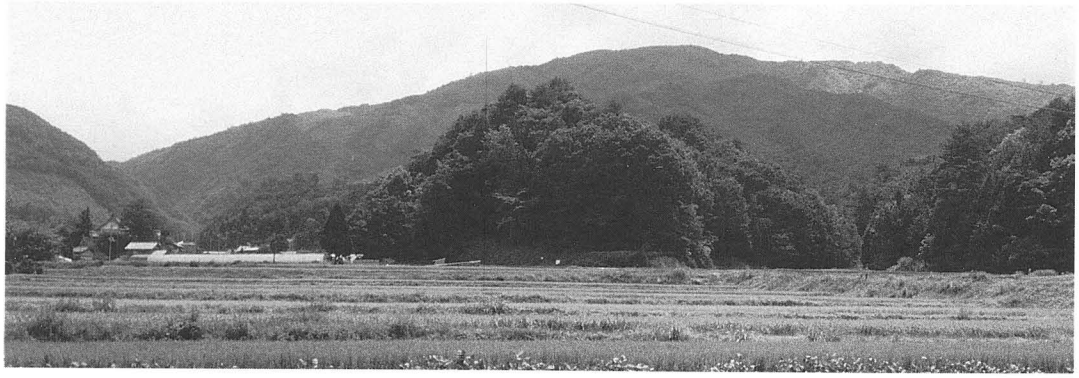
19、船井武彦・杉谷美恵子・平川誠1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会

22、渡辺貞幸1992「成果と今後の課題」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室

23、島根大学法文学部考古学研究室1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』



(1) 千年比丘丘陵全景（東から）



(2) 千年比丘丘陵近景（北から）

(3) 1号墳発掘前の状況（南から）

(1)　1号墳墳丘北トレンチ

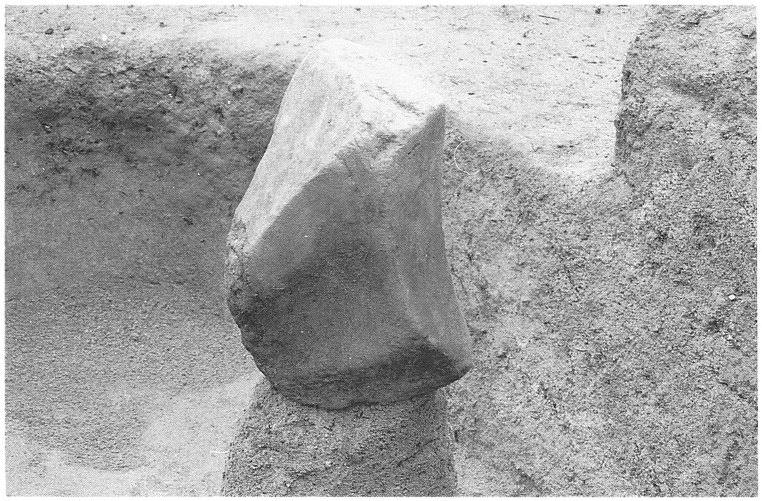
(2)　1号墳墳丘南トレンチ

(1)　1号墳主体部と供献土器の検出状況（北から）

(2)　1号墳主体部と供献土器の検出状況（東から）

(1) 砥石と供献土器の出土状況（南から）

(2) 砥石と供献土器の出土状況（北から）

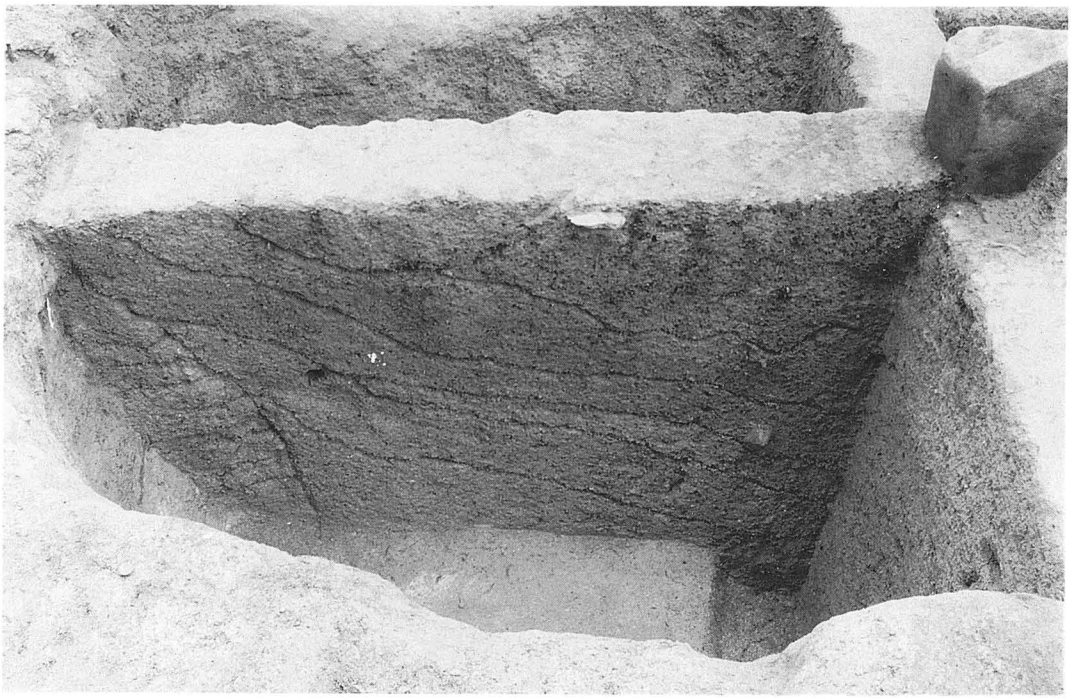


(3) 砥石の出土状況

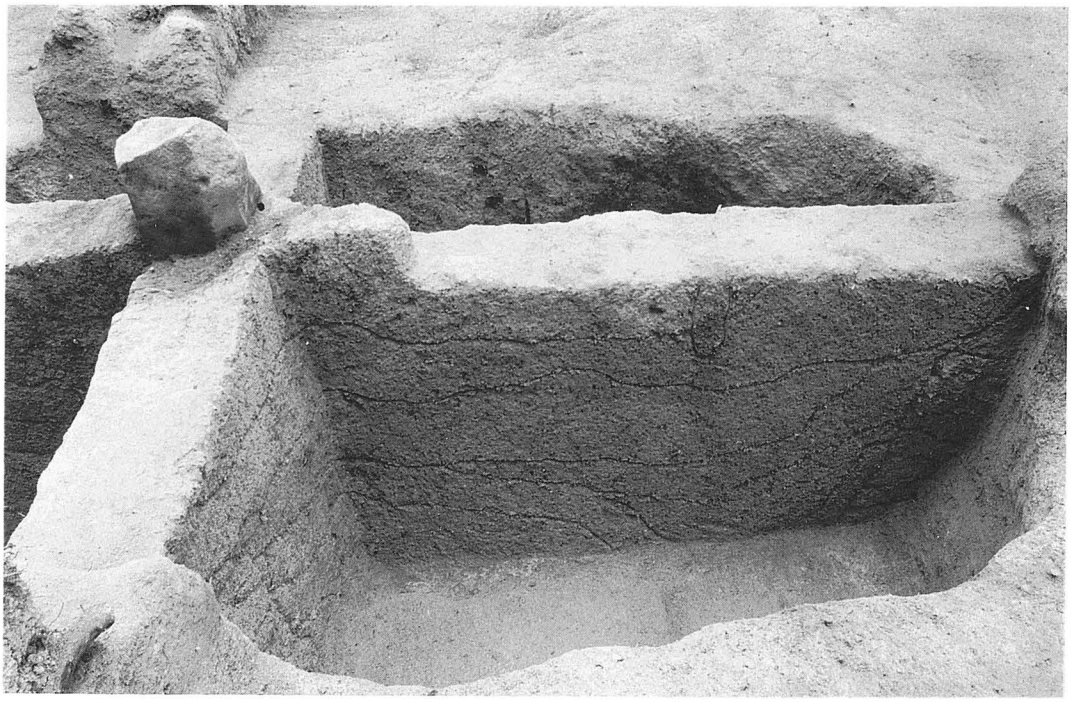
(4) 砥石と中央主体の位置関係（北から）

(1)　1号墳中央主体の木棺痕跡（東半分）

(2)　1号墳中央主体の土層横断面



(1)　1号墳中央主体の土層縦断面（東半分）



(2)　1号墳中央主体の土層縦断面（西半分）

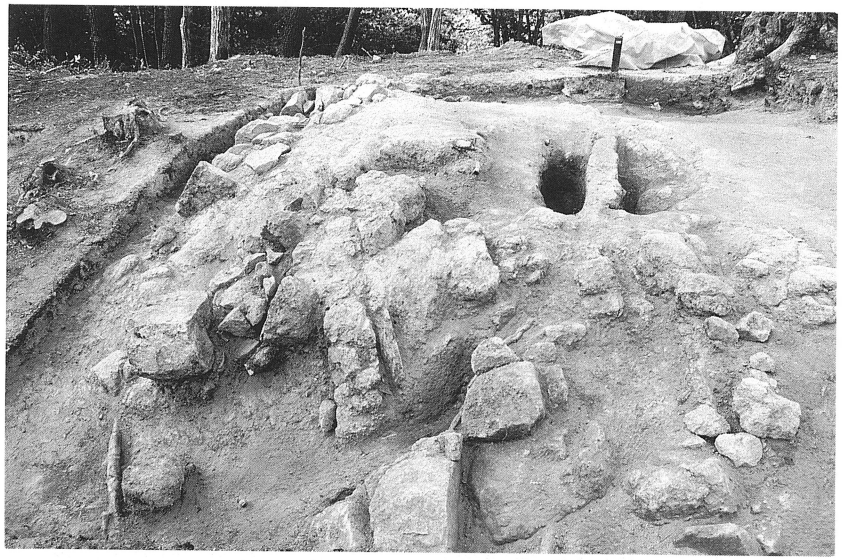
(1)　1号墳中央主体の木棺痕跡検出状況（北から）

(2)　1号墳中央主体完掘状況（北から）

(1)　A地区（段状遺構）発掘前の状況（南から）

(2)　A地区（段状遺構）完掘状況（北から）

(1) 「２号墳」発掘前の状況（南西から）



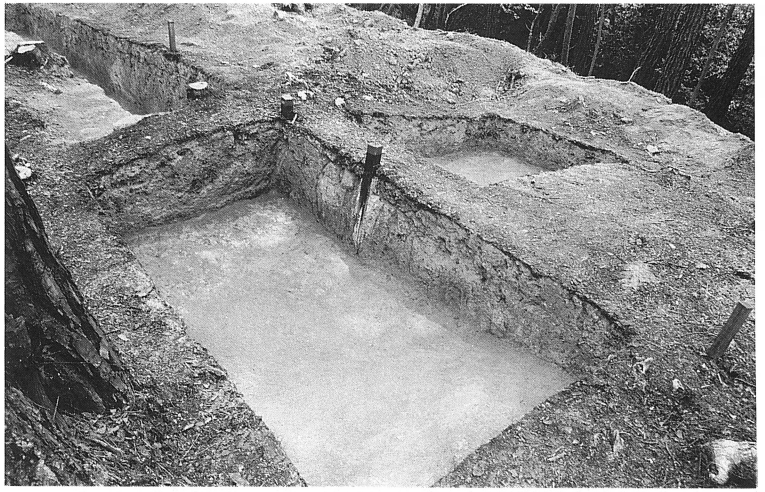
(2) 「２号墳」２区完掘状況（南から）

(3) 「２号墳」「前方部」完掘状況（東から）

(1) 「２号墳」Ⅰ～Ⅳ区完掘状況（南東から）

(2) 「２号墳」４区完掘状況（西から）

(3) 「２号墳」６区完掘状況（西から）



(4) 「２号墳」５区完掘状況（西から）